

## 歴史的シリアをゆく

—シリア・ヨルダン総合研究紀行—

堀江 洋文

今回人文研が旅したシリアとヨルダンは、昔の大シリアの一部である。アラビア語でシャーム地方と呼ばれるこの歴史的シリアは、シリア、ヨルダンの他に、レバノンやパレスチナ、場合によってはトルコの一部（後述する現トルコのハタイ県）等をも含む広大な地域である。戦後のシリア政権は、公言はしないもののこのような大シリア主義に基づく権勢拡大願望が随所に現れることがあったが、もちろん我々旅行者には遠い世界の話である。政治とは無縁の旅であったが、随所に現実政治の影響を肌で感じる事ができた。

今回の調査では、当初イスラム圏のほかにイスラエルを旅程に加えようと検討してみた。日程上もう1カ国追加することは困難であるとの理由で、今回はそれを断念しイスラム教国に特化して調査することにした。イスラエルへの入国にはビザの問題もある。イスラエル入国時に押されるスタンプは、以前は別紙に押してくれたようであるが、今は係官によってはパスポートに押す場合もあり、それによって以後同じパスポートを使ってのイスラム圏への入国が困難になると聞いていた。現地で話を聞くと、確かにシリアへの入国は難しいかも知れないが、ヨルダンへはイスラエル観光の欧米人が一日旅行でヨルダンのペトラや死海を訪れているとのことで、日本で言われている程困難な状況ではないらしい。実際ヨルダン川のイエスの洗礼地やモーセ終焉の地ネボ山、或いは世界遺産のペトラには、イスラエルからの1日旅行のツアーが多く来ているとの話であった。1日旅行であるため、ヨルダン観光地の地元に落ちるお金は少なくなる。それに対処するためかヨルダン政府は、例えばペトラにおいて、現在40ドルのペトラ遺跡入場料を2010年1月から若干値下げした後、年末からは一挙100ドルに引き上げるとのことである。1日旅行者から多くを取ろうとの意図であろうが、イスラエル旅行の欧米人をより多くヨルダン滞在に導きたいとの当局の気持ちも理解できないでもない。今回シリアとヨルダンを一つの括りにして考えていたが、後述するように同じイスラム圏の隣国でありながら近代化や経済状況の違い等、多くの点で非常に異なる2国であることが印象的であった。

### 1. 商業都市アレッポ —混沌と秩序—

2009年の年の瀬もせまった12月23日、イスタンブル経由でシリア北部にある同国第2の都市アレッポに着いた。アラビア語ではハラブと呼ばれるこのアレッポの地は、喜望峰ルート

が発見されるまで東方地域から送られる香辛料や染料の中継基地の役割を果たしていた。イングランド、フランス、オランダはこの地に商館を設置するが、ハーン(khan)と呼ばれる嘗てのキャラバンサライ(隊商宿)の一つであるハーン・アル・ジュムルク(ジュムルクとは税関のこと)にいくつかの商館が置かれていた。ペルシアやメソポタミア川流域からの隊商の終着地として発展し、アレppoは一時交易量等においてイスタンブルを上回る勢いであった。海洋交易の時代にあつてアレppoの弱点は、町が内陸に120キロ程入った地にあつたことである。地中海との交易には、現在はトルコ領となっているアレキサンドレッタ(現在の名称はイスケンデルン)を交易港として使っていた。記録では、交易船がアレキサンドレッタに着くと、アレppoの商館に伝書鳩で船の到着が連絡される。商館の駐在員と到着船間の連絡役である海運受託売買人(factor marine)に対しては、商館側が隊商の編成に関して、例えば梱包や積み込み方法等様々な指示を出し、それに基づいて荷揚げされた製品の運搬に当たる隊商が組まれるのである。アレppoとアレキサンドレッタ間には頻繁に盗賊が出没したと言われ、荷役の安全な運搬のためにはキャラバンの編成が不可欠であった。製品のアレppo到着後も、商館員が直接製品を販売することはなく、多くはアルメニア人やユダヤ人の仲買人の手に委ねられた。

現在アレppo市内の北東部にはジャディデと呼ばれるキリスト教地区があり、ギリシア正教会やアルメリア大聖堂等を見ることができる。この地区にアルメリア人達が入り込んだのは、今も国際問題として話題に上るトルコによるアルメリア人大虐殺以降であると聞かすが、そのずっと前に仲買人の仕事を求めて移住したアルメニア人コミュニティがこの地区に存在していた。アレppoのキリスト教会の構成は歴史的に複雑である。ギリシア正教とギリシア・カトリックが対立関係にあり、シリアにおいて歴史上いくつかの事件を起こしてきた。オスマン帝国内の東方キリスト教会諸派の中にはローマ・カトリックに宗旨替えする分派が増えていくが、それにともなつてギリシア正教とギリシア・カトリックがしばしば対立軸を形成することとなる。ハーンには領事館の他にカトリックの宣教団も所在していたが、宣教団はカトリック諸国の保護を受けつつ各種特権を享受していた。彼らはギリシア正教会、アルメニア正教会或いはシリア正教会から信徒を引き抜き、ローマ教皇に忠誠を誓うカトリック分派が徐々に増加していった。しかしこのギリシア・カトリック自体も、アレppoにおいて最大多数を占めてはいたが、19世紀初頭には内部対立のために分裂状態にあつた。このような状況下オスマン政府は、カトリックの信徒をギリシア正教の儀礼でもって統合しようと計画する。アレppoのワーリー(オスマン総督)は、実質的にアレppoのギリシア正教会府主教ゲラシモス側に立つたために、1819年10月にカトリック信徒はワーリーに対する反乱を起こす。ヨーロッパのカトリック勢力は当然ギリシア・カトリック支持であつたが、アレppoのムスリムもオスマン政府の支持を取り付けたギリシア正教側ではなくカトリック側への支持を明確にした。死傷者の出た衝突事

件であったが、シリアにおける宗派関係の複雑さを物語る出来事である。ギリシア正教とカトリック勢力の確執を和解に導こうとする動きについては、この後ダマスカス近郊で訪れるマールーアの町の聖セルジウス修道会に言及する時に再度触れることとする。

24日アレppoの朝は、円からシリア・ポンドへの両替の混乱で約40分浪費することとなる。その前にまず訪れたのは、国立博物館(National Museum)と呼ばれる考古学博物館である。博物館正面には、トルコ国境に近いテル・ハラフ出土の3頭の動物の背に乗った神々の像があり、神々の目は白目に丸い黒目というどこかの美術書でよく見かけた光景である。アラム王国宮殿の入り口を復元したものだそうだ。内部は時代別に展示がなされており、最も印象的な展示はやはりマリ遺跡出土のものであろう。この展示に関しては、出土品のレベルはダマスカスの国立博物館にも匹敵すると思われる。ユーフラテス川中流域西岸のマリ遺跡は、距離的にはアレppoとダマスカスとは等距離にある。しかし、ユーフラテス川に沿って肥沃な三日月地帯を遡れば、先ずアレppoに到達する。アレppoにマリ遺跡の出土物が多く確保されているのも当然と考えるのは、中央(ダマスカス)にすべてが集まる状況をよしとしない考え方と結びつくのかもと想像してしまう。10数年前人文研の総合研究旅行で中国の西安を訪れたが、その中国陝西省歴史博物館の職員が同じようなことを言っていた。西安の国立歴史博物館は所蔵品においては中国第一であることを誇るが、なるほどその展示物の内容は質量ともにすばらしい。館員の話では、北京にこれらの多くを持っていかれるところだったが、それを未然に防いで立派な博物館を設立したとのことで至って誇らしげであった。陝西省歴史博物館ほどの壮大さと展示のきめ細かさがないアレppoの考古学博物館は、建物も古くウマイヤ朝以後のイスラム遺跡コーナー以外は、展示の仕方も出土物の保存状況も資金不足が影響しているのか、いかにも田舎博物館的で今後の検討が大いに期待される。ユーフラテス川中流域の都市国家マリからの出土物の他には、ウガリットの遺跡から発掘された数点の出土物も印象的であった。しかし、ウガリットからのものについては、2日後に訪れたダマスカスの国立博物館展示物と比べて若干見劣りがする。

ウガリットは、現在のラタキアの北に位置する遺跡ラス・シャムラにあった古代都市国家である。ウガリット関連の所蔵品については、シリアのアレppoとダマスカスの他にはパリのルーブル博物館の所蔵物が良く知られているぐらいで、世界的にも稀少な展示である。ラス・シャムラからの多彩な出土品は、このアレppoにおいて十分に堪能することができた。ウガリットの重要性は、ダマスカス国立博物館で見た世界最古と言われている楔形アルファベット文字が書かれた粘土板の発見と、シャルル・ヴィロロー等によるその解読の成果にある。(一方、アレppo考古学博物館所蔵の楔形文字粘土板としては、アレppo南西約55キロ地点にある昔の都市国家エブラ出土のものが有名である。エブラ文書から読み取れる古代エブラ世界と、旧約聖書

及びウガリットの世界の関連性については現在も多方面から議論がなされている。)ウガリット文字はアルファベットの原型となったとされているが、実際にその文字を見てみると、素人目にはアルファベットの文字体系には直接繋がっていないようにも思える。さらに注目される点は、ウガリット学が旧約聖書解釈に与えた影響である。死海写本で知られるクムランと同等の価値をウガリットが持っていると主張する学者もいる。即ち、ウガリットの発見が旧約聖書の時代背景に関する我々の知識に大きな革命をもたらしたのである。嵐と稲妻と雨をつかさどる神として他の豊穡の神々より高い地位にあったバアル神は、ウガリットの中心的神であった。旧約聖書の中では、列王記第1にあるバアル神の預言者とエリアの対決や士師記に描かれるバアル神は、イスラエルの神に対峙して偶像崇拜の対象としての神として描かれている。バアル神は雨を降らせる神として、土地に豊かさを与え収穫を約束すると信じられたことからカナン人の信仰の対象となった。しかし、バアル信仰や同じような豊穡神信仰は、イスラエルのヤハウェとの契約の中に示された倫理的原則と相容れないものであった。見学を終えて外に出ると、すし詰め状態でスクールバスに乗ってきた小学生達が、バスを降りて丁度博物館に入ろうとしていた。我々はバスに戻って次の調査地バロン・ホテルへ向かった。

バロン・ホテル正面に立つと、20世紀初頭の高級ホテルの様相は漂わせているものの、維持管理が行き届いていないことは一目瞭然である。しかし、アガサ・クリスティを始めとして、映画『アラビアのロレンス』の主人公T.E. ロレンス、セオドア・ルーズベルト、チャールズ・リンドバーグ、そしてもっと最近ではアサド前大統領もここに宿泊したと伝えられている。特にアガサ・クリスティは、このホテルの部屋で『オリент急行殺人事件』の最初の部分を書いたと言われるが(残りの部分はイスタンブールのホテル・ペラパレスで書かれた)、考古学者である彼女の夫マックス・マローワンが中東に赴く際に同行した彼女が利用したホテルであったのかと推察する。我々はこの部屋の見学を希望した。今も営業を続けるホテルの一室に大挙して押しかけるのも難しいかなと思っていたが、フロント前のバーで各自ドリンク一杯注文すれば部屋を見せてくれるとのことであっさり交渉成立である。そこで、ビールを片手にカウンターでロレンス気取りの者や、フロアのテーブルでお茶を飲みながらアガサ気分に入る参加者で閑散としていたバーが一瞬華やいだ。アガサ・クリスティの部屋やロレンスの部屋、おまけにアサド前大統領宿泊の部屋を訪れたが、本当にこの部屋なのかと思えるほど部屋は狭く調度品も慎ましい。その他にチャールズ・リンドバーグ、ケマル・アタチュルク、セオドア・ルーズベルトもここに宿泊しているとのことであるが、当時としてはこの地の高級ホテルもこの程度かと妙に納得しながら部屋を出た。ホテル前の銀行では男達が長蛇の列を作っている。ガイド君によると今日燃料費の補助手当が支給されるのだそうだ。アラウィ派現政権によるスンニ派下層階級取り込み策の一つかと良からぬ想像をしてみたが、この直後筆者はこの雑踏に巻き込ま

れることとなる。

シリアの通貨管理は幾分厳しいとは聞いていたが、到着直後であるため現地通貨を至急用意しなければならない。そこで、全員をバロン・ホテルの前に残して、アレッポの新市街の繁華街に点在する銀行を渡り歩く破目になった。どの銀行も入り口付近は燃料手当を求める男達でごった返している。その間を彼らの視線を感じながらかき分けて、やっとのことで奥のカウンターにたどり着く。愛想の決して良くない行員とやり取りするが、どうもドルやユーロと違って円の両替が難しいらしい。先ず紙幣自体を見たことがないのか、20枚程の1万円札の透かしを一枚一枚じっくり見たり手で感触を確かめたり、更には本店に電話をしたりしているが一向に埒が明かない。「日本銀行券だぞ。」との心の叫びもむなしく、結局5行を梯子してやっと両替に成功した。中国や韓国製品に比べシリアにおける日本製品の浸透度の低さは目撃したが、ここでも一時と比べ円の地位が国際的に低下しているとの実感が得られた。嘗てフランスに支配されたこの国では、ヨーロッパ通貨に比べ円やドルの地位などなかったのかもしれない。およそ40分の無駄をしたが、この両替時の混乱がこの日のその後の旅程に大きく影響することとなる。

両替を終え懐が若干豊かになった気持ちになって、メディーネと呼ばれる旧市街の商業地区に入って先ずアレッポ城を訪れた。下から見上げると正に城砦 *citadel* である。紀元前10世紀に建設されたこの城砦は、十字軍、モンゴル、ティムールの攻撃にも耐えた頑強な建造物である。今残されているものは、多くが1250年から約270年この地を支配したマムルーク朝時代のものであると言われているが、モスクやハンマーム (*hammām* アラビア語、トルコ語ではハمام *hamam* と発音) と呼ばれる公衆浴場の跡等も立派に保存され当時の栄華を想像することができる。そしてこのアレッポ城から西に延びるのがスーク (市場) である。東端にあるアーフィーヤ門をくぐると先ず目に付くのが布地店舗の並びであり、調子のいい兄さんたちが片言の日本語と英語で語りかけてくる。布地の次には、貴金属、食肉 (主に羊)、菓子、ナッツ、スパイス、雑貨等の店舗が続き、中東の市場らしい喧騒と雑然とした店構えの中にあってもそれなりの秩序が保たれている。中国製品らしい安い衣類や雑貨の市場と化してしまった感のあるダマスカスのスーク・ハミディーエ辺りと比べると、混沌の中にも中東のスークらしさを十分に保っている。活気溢れる雑踏の狭い道を縫うように走る軽トラックと荷車の列を巧みに避けながら西にスークを下っていくと、少し入った所にはハーンや大モスク (預言者ザカリアの名前からジャミア・ザカリーエとも呼ばれる)、そしてハンマームも見られ、それらはスークの一部として十分に溶け込んで機能しているのである。正に誰かが言った「混沌からの秩序」である。

先ず大モスクの南に位置し、アイユーブ朝時代から続くハンマームの一つを見学することが

許された。通りの入り口から階段を下りると番台ならぬ従業員席があり、気さくな男性が笑顔で我々を迎えてくれた。その奥で数人の男性客が浴後の会話を楽しんでいた。不意の訪問客を気にする気配もなく寝そべって午後の一時を楽しんでいるようで、逆に女性参加者を多く抱える我々の方が緊張してしまった。浴場に向かうと暖かく心地よい湿り気が皆のメガネを曇らす。このハンマームは男性のみであるが、女性用もあると聞く。一般には男女交替制（曜日によって、或いは昼は女性用、夜は男性）のところが多。しかし、ドミニク・アングルの絵画『トルコ風呂 Le Bain turc』に湧き出るオリエンタリズムのイメージはこの場からは浮かばない。シリア男性の社交場がマクハーと呼ばれる喫茶店であり、男たちはそこでコーヒーや水煙草を楽しむのであるが、シリア女性にとっての嘗ての社交場はハンマームであったとの話を聞いた。「女湯」の方はあの絵画のような雰囲気なのであろうか。

続いてスーク隣接の大モスクを見学した。スークの商人や職人達にとっては、仕事の手を休めていつでもこのモスクに礼拝に入れる距離であり雰囲気である。一日 5 回の礼拝（サラート）の場がスークに隣接することで、彼らの生活の一部になっている感がある。ダマスカスのウマイヤド・モスクと比べると、ここでは女性の服装に関しては寛容であると聞いていたが然にあらず。女性は入り口で被り物の確認を受け、日本から持ってきたスカーフを身に着けると、コート丈が膝上の場合には備え付けの薄手の羽織が貸与された。リュックの上にそれを着るので、まるでねずみ男か雨の日の小学生の登校風景である。シリアの街角でブルカやチャドルを着た女性を見ることは稀であり、イランやアフガニスタンと比べると女性の服装に関しては比較的規則が緩やかと思えた。道行く女性の多くが身に着けるのは、せいぜい頭を覆うヘジャブぐらいである。しかし、一応モスク入場時にはそれなりの服装が求められる。街角でたまに見かけた黒装束に身を包んだ彼女達は、厳格なイスラム教徒かイラン辺りからの巡礼者だったのかも知れない。モスクの中では、礼拝時ではなかったもので、大モスクのイマーム (imam 導師或いは宗教指導者) らしき人物がコーランの講釈 (説教) を行っており、その周りに数名の男達が鎮座して聞き入っていた。シーア派イスラム共同体 (ウンマ、umma) における霊的指導者イマームのような仰々しさはないが、このイマームはもしかすると後述する町のマドラサ (学院) の教師ウルマーが兼務しているのかも知れない。イランのイマームのような謎めいた神秘性はなく至って庶民的で、辺りにはキリスト教会における聖書研究会的雰囲気がある。

モスクを一回りした後、モスクを出てハーン・アル・ジュムルクへ向かう。ハーンは普通 2 階建ての構造で中庭を持ち、昔は 2 階には回廊が巡らされており隊商達のための宿泊施設となっていた。そして 1 階には、取引所や倉庫、更には畜舎が置かれていた。筆者にとってはアレポ訪問で最も期待していた場所であるが、後から地図で位置関係を調べると、どうもシリア北部地区に不案内なガイド君は、その隣のハーン・アル・ナハスィーンに我々を案内した可

能性が高い。16世紀前半に作られたこのハーンは、ハーン・アル・ジュムルクよりもかなり小規模で、長年ヴェネチア領事やその後ベルギー領事が居住していたようである。ところでその後も、ダマスカス出身のこの素人ガイドには少々悩まされることとなる。アレppo在住のヨーロッパ人は、アレppo市内のいくつかのハーンに分かれて居住していたらしい。例えばフランス人はジュムルクの他にも4つ程のハーンに住み、そのうち大モスクの西側に位置する今日のハーン・アル・ヒバルにはフランス領事館があった。領事たちや宣教師はハーンに居住することが義務付けられていたのである。領事館と商館は同じものと考えてよいが、自国に有利な交易条件を獲得することが主たる任務として期待されていた。そのような任務遂行のためには、領事通訳(dragoman)の存在が不可欠である。領事通訳は外交的庇護を受けることができ、商品にかかる関税も、自由交易特権付与協定(capitulation)によってヨーロッパ人と同じく3パーセントに抑えられていた。彼らは領事館が関与する交渉で通訳をしたのみならず、各種特権を利用して自らのために商業活動にも従事していた。フランス等のカトリック諸国は、通訳職に東方教会出身者よりマロン派等のカトリック教徒を使うようになり、そのことがアレppoのキリスト教社会のカトリック化を促進することになった。

ところで、1798年のナポレオンによるエジプト侵攻時には、アレppo市内のフランス人居住者全員がハーン・アル・ジュムルクに連行され、その後群集の見守り中を城砦まで歩かされている。丁度我々が城砦から下ってきたスークの道を逆方向に歩いて行ったのではなかろうかと想像される。この時フランス人とその庇護民全員の財産が差し押さえになったとの記録がある。ナポレオンのエジプト遠征に対するオスマン・トルコ政府の対抗措置により、アレppoにおいて被害を被ったのは駐在フランス人に止まらなかった。オスマン・トルコ部隊やイエニチェリ(本来オスマン・トルコの正規部隊であるが、この頃には在地軍化していた)への糧食等戦費調達のための税負担として、ナポレオンのエジプト侵攻の影響はアレppoの地元住民達にも大きくのしかかることになる。

結果的にフランスのシリアへの侵攻は、オスマン帝国とイギリスとの連合によって撃退されることとなる。しかし、ナポレオン戦争が終わっても欧州列強の影響は、経済活動の活発化によってシリアをはじめアラブ諸国に拡大していく。19世紀に始まる政府、司法、税制、経済分野での改革運動も、所詮は支配階級や政府の高官、ヨーロッパ貿易の従事者、更にはそのような交易に従事するキリスト教徒やユダヤ教徒を利する結果となり、改革の恩恵を受けない地方等の反発を買うこととなる。レバノン山中では、嘗ては共存していたマロン派キリスト教徒とドゥルーズ教徒の関係も1830年代に崩れ、1860年に勃発したレバノン内戦の影響は、ダマスカスではキリスト教徒の虐殺という結果を招く。オスマン帝国の改革運動や、それと連動したヨーロッパ列強の権益に対する反発の動きがその根底にあった。1860年の混乱については、

バイルートのイギリス総領事等からの詳細にわたる報告がイギリス議会資料にコマンド・ペーパーとして残されている。このような暴動は、結果的に欧州列強の介入を更に促進することとなる。

ハーンで各国商館や領事の居住地を調べる暇もなく、アレッポ大学学術交流日本センター訪問の時間が迫っていたので、急遽スークでの調査を切り上げて大学に向かった。筆者は所要のためその後も数時間スークに残ったため、大学のアハド・アルマンスール氏に案内していただいた学術交流日本センター訪問の様子は、本稿の追記にある内藤雅雄先生のセンター訪問記に譲ることとする。スークは西の端のアンターキーヤ門まで緩い下り坂で、門の手前には小さな宗教的集会所（ザーウィヤ）と思しき場所があった。集会後の雑談であろうか年配の商店主達で賑わっていた。ザーウィヤでは、宗教的知識の交換や内的儀礼が定期的に行われているとのことであるが、通りの暗闇に対して電灯に照らされた中の賑わいは正にそのような真摯な雰囲気醸し出していた。ハンマームの気だるさとザーウィヤの厳肅さがこのスークでは妙にマッチしている。実は時間が許せば、このスークで、ハーン・アル・ジュムルクの西に位置するマドラサ(Al-Madrasa al-Ahmadiye)を訪れる計画をしていたのであるが、両替事件の影響でこれも叶わなかった。マドラサはムスリムのためのイスラム学校とも言え、イスラム世界の高等教育機関との位置づけも出来よう。シーア派に対抗するためのスンニ派の教育施設で、教育内容にイデオロギー性があったとの指摘もあるが、伝統的宗教諸学の修得の場と考えるのが一般的であろう。最近西欧諸国においては、マドラサをテロリスト養成のイスラム神学校と理解する人達もいるが、それは大いなる誤解である。ところで宗教と言えば、イスラム世界ではワクフ（寄進財）の習慣があり、生前に自分が持っている財産を神に寄進して、いわば宗教的基金としてそれを公共の慈善施設等の建設に使うのである。ここアレッポのスークの周りにも、嘗てそのようなワクフで建てられた建造物が多く残る。今日では、このようなワクフは一端国庫に入ってから分配されるそうで、直接的な寄進がもたらす様々な人間関係が無くなってしまっているとの不満を聞いたことがある。しかし、持つ者が他人を助けることはムスリムの義務でもあることから、今日ではザカートやサダカと言った喜捨（慈善行為）が広く行われているようである。

大学訪問が終わり、夕食はアレッポ城近くのアルマンスール氏行きつけのレストランで食べることにした。イスラム圏でのクリスマス・イヴで、街中にクリスマスの華やいだ雰囲気はないが、このレストランはイルミネーションでクリスマス気分を盛り上げようとしていた。シリアには、少数派とは言えかなりの数のキリスト教徒が、ダマスカスのキリスト教地区を中心に居住している。先述したようにアレッポにも、アルメニア人を中心としてキリスト教徒地区が町の北部に存在する。ところで食事は、ホブスと呼ばれるアラブパン、ヒヨコ豆を潰して作ら



れたフムス（フムス）や、焼きナスをペースト状にしてタヒーナ（ごまペースト）と混ぜたムタッバルと称される前菜の食感が今も最も印象に残っている。これら所謂アラブ料理の定番料理の他に、クッベ・ナイエ（生クッベ）を前もって予約注文しておいた。羊の生肉をペースト状に練りこんだもので、前菜とは言え我々にとってはこの日の料理の最注目ディッシュである。その他には、同じクッベでも揚げたクッベであるクッベ・マクリーエ（肉団子を揚げたようでクロケットを想起）も、アルマンスール氏推奨の料理であり美味であった。フムスと言えば隣国イスラエルでは特にダマスカスが有名で、1993年にイスラエルとパレスチナ解放機構（PLO）がオスロ合意に署名し、イスラエルとアラブ諸国との共存という「新しい中東」への期待が高まった頃、「ダマスカスでフムスを食べよう」との言葉が流行ったらしい。イスラエルが設置した分離壁の「効果」で近年テロの数が減少したイスラエルでは、残念ながら以前のような周辺アラブ諸国との和平を強く希求する世論は弱くなっていると聞くから、もうシリアのフムスの話はイスラエルでは聞かれないのであろうか。

翌 25 日、朝早くに宿泊ホテルであるトルコ系のデデマンを出発する。ダマスカスに向かう前に、予定外ではあったがアレppo石鹸の工場見学に出かける。アルマンスール氏の知り合いが経営する工場で、氏も同行して案内役を買って出てくれた。アレppo石鹸はオリーブオイルとローレル（月桂樹）オイルを 2 日程攪拌して作られる。月桂樹の割合が高い程高価な石鹸となり、効用も期待できるとのことである。アルマンスール氏の経験では、月桂樹の割合が 18～24%ぐらいが最も費用効率が良いとのことである。もう長年設備投資をしたことがないような古く薄暗くて小さな個人企業であったが、社長を初めとして皆愛想がよい。心から歓迎してくれているようであった。アルマンスール氏は大学では金属工学(metallurgy)の専門であるが、この工場のザナビリ社長(abdul badih zanabili)とは懇意で訪問客等をしばしば工場に案内して、ご自身もここの石鹸をよく買われるらしい。工場入り口の社長室（位置的には守衛室である）に招かれると、壁に日本の特許庁長官の署名の入った特許状が飾られていた。日本との交易関係に加えて、この会社はイタリアとの関係も深く、そこから他の EU 諸国に石鹸を輸出しているようである。しかしシリアの石鹸産業にも中国製品の影響が出てきているという。少なくともシリア国内では、香料を使い香りのよい安価な中国製品に市場の一部を奪われるようになったとのことである。シリア経済は、基本的には 1958 年に規定された社会主義イデオロギーに基づく枠組みの中で運営されてきたが、近年徐々にではあるが改革が進み、ザナビリ社長の工場のような個人企業も成長しているようである。しかし、個人所得の低い一般シリア人にとっては、衣服等もそうであるが安価な中国製品を手にする機会が多いと聞く。アフリカ諸国でもよく見かける構図であるが、安い中国製品の大量流入により競争力のない地場産業が崩壊していかないか心配である。工場では、攪拌器の他に階下の薪ボイラー室や 2 階の石鹸を固める部

屋を見せてもらったが、どれも年季が入っていて実に趣がある。大きな社会主義的プロジェクトではなく、このようなシンプルで小規模ではあるが確たる技術を持った個人企業が成長することこそ、低迷するシリア経済を下支えすることになると思われた。

## 2. 反政府闘争の町ハマからアラム語の町マアルーアへ

石鹸工場の見学を終えると、次の訪問地であるハマに向かった。ハマまでの国道は霧のため視界不良。寡黙な運転手も至って慎重である。3年前の西インド総合研究旅行の時の、霧のデリーを発ってジャイプールにバスを走らせた時と全く同じ光景である。インドやベトナムのチャーターバスの運転手のように、反対車線を走行したり時間短縮のために国道の分離帯を横切るような奔放な運転は見られない。規律正しさは社会主義の成果であろうか。霧に隠れて見えないが、この地域はシリアで最も肥沃な農業地帯である。チグリス・ユーフラテス川から三日月型に展開する肥沃な地域の一部を形成し、古代から文明が花咲いたのもうなずける一帯だ。旧約聖書の中で、アブラハムもカランからカナンへの移動の際にこの地域を通ったはずである。霧の晴れ間には、オリーブの他に各種農産物の作付けの形跡を見ることができる。やっと農業地帯らしくなってきた。それにしてもシリアの道路には、現代(Hyundai)や起亜(Kia)といった韓国車がやたら目に付く。半分ぐらいは韓国車であろう。これがヨルダンに着く頃には、韓国車に代わって日本車が目に付くようになる。より高価な日本車を買えるヨルダン国民を見ると、両国の経済力の差を示す一例であろうかと納得する。しかし、より豊かなヨルダン人がより高価だが性能の良い日本車を買って、個人の経済力で落ちるシリアの人々が韓国車を買うという発想自体が、筆者も含めた日本人消費者の浅はかさかも知れない。韓国車の性能を馬鹿にしているのは日本の消費者だけで、日本の自動車メーカーはそろそろ韓国車が技術的には日本車に劣らないと脅威を感じ始めているようである。アメリカの消費者動向に多大な影響を与えている市場調査会社「JD パワー」の昨今のアメリカでの技術力調査ランキングでも、現代車の技術力は証明済みである。同じ性能で価格が3割安ければ、勝負は既に決まったようなものだ。ヨルダンにおいても、日本車が韓国車の後塵を拝する時が近い将来来るのではなかろうかと一瞬悲観的になってしまった。サムスンやLG電子といった韓国優良企業の例を出すまでもなく、日本企業が不況で「縮み思考」に陥って民間部門も「劣化」が進んでいると噂される間に、韓国メーカーのこの2年ほどの躍進は欧米のみならず中東でもすさまじい。サムスンのCEOのインタビューを聞いても、湾岸諸国から中東地域、そして北アフリカには力を入れているようである。色々調べてみると、急躍進の裏には韓国企業の現地駐在員の現地市場調査的的確さと、その調査結果を受け入れる本社の対応の速さがあるようだ。どうもこれ

まで日本企業は、優秀な日本製品を受け入れられない国はその国が悪いとの考え方を持ってきたようである。このような製品は発展途上国では過剰な技術である。日本企業では営業よりは技術系優先の会社も多く、第3世界へ売り込むための技術系と営業の合同体制はこのところやっと一部で始まったところであろう。聞くところでは、LG 電子がムスリムの多い中東向けにコーラン内蔵プラズマテレビを売り出しているということであるが、このような着想も現地調査の結果であろう。ハマに着くころには霧はすっかり晴れていた。

ハマの有名な水車は渇水期のため活動停止中だったが、しばらく旧市街を歩いてみた。途中礼拝の時刻であることを呼びかけるアザーンが流れ、旧市街の通りのモスクにはあつという間に男達が集まっていた。通りにも男達は溢れ、道の半分を塞ぐように敷物を引いて10人ぐらいが礼拝をしていた。気のせいかわ彼らの視線の厳しさが気になった。ハマの旧市街は1982年の大虐殺事件でも知られる。丁度その2年前の光州事件をも彷彿とさせる出来事であるが、ハマの虐殺事件の半年後には、最近日本でも公開された映画『戦場でワルツを』(*Waltz with Bashir*)の題材ともなった隣国レバノンの西バイルート郊外でのパレスチナ人虐殺事件が起きている。レバノンのマロン派系の右派政党・民兵組織であるファランヘ党が、自分達の指導者と仰ぐバシール・ジュマイエル大統領が暗殺されたことへの報復として、パレスチナ人キャンプであるサブラとシャティラで虐殺行為を行った事件である。この事件に、バイルート駐留中のイスラエル軍も間接的に関与したとして問題となった。一方ハマの事件は、反アサドを掲げるシリア・ムスリム同胞団に対する政府軍の旧市街攻撃の中で起きた事件である。27日間の包囲と攻撃によって約1万人の市民が犠牲になった他に、モスク、教会、スーク、ハンマーム等町機能全体が破壊されたと伝えられる。これはシリア・アラブ共和国史上最大の反体制運動であり、アサド・バアス党政権は、この反乱事件後益々権威主義的な治安国家体制の様相を呈していく。急進的イスラム主義者による反政府武装闘争は、既に70年代末から始まっており、80年代に入ってからのアレッポ、ハマ、ホムスでの民衆蜂起も国民がイスラム主義者の主張に賛同したものと解釈できる。このようなイスラム革命が70年代末にイランで成功しシリアで失敗した原因としては、シリアにおける宗派や民族の多様性が挙げられよう。シリアのイスラム革命をイランが支持しなかった背景には、対立が深まっていたイラクを牽制するために、イランがシリアのバアス党政権を支持していた背景がある。ムスリム同胞団を中心にイスラム主義勢力が糾合されシリア・イスラム戦線が結成されるが、その宣言及び綱領を読んでも、当時人口の僅か10%を占めるだけのアラウィ派の宗派的政権が多数派を支配する不合理を強く訴えている。

ダマスカスへの道を南下する途中、石油精製所が国道の左手に突然姿を現す。シリアは北東部に僅かな石油を産出するが、埋蔵が尽きるのもそんな先ではないらしい。現在のところ石油

は、シリア北東部でイラクのクルド人の地にも近いカミシリ周辺の油田で採掘され、アレッポを経由して石油精製工場のあるホムスへ輸送されている。そこから地中海沿岸の都市バニヤスに送られ輸出されていると聞く。石油が枯渇してもサウジを初め湾岸諸国との良好な関係さえあれば石油の輸入に問題はないが、それでもこの国にとってはかなりの財政的負担となるであろう。ところでバニヤスはイラクやサウジアラビア産原油の積み換え基地となっているが、交易と輸送に関してはシリア国内の北東部と南西部では物資の流れが違うらしい。アレッポを中心にハマやホムス、更には北東部農業地帯の農産物や交易品は、ラタキア港で船積みされて地中海へと輸送されていく。それに対して南西部のダマスカスや南部のハウラン地方、そして海岸線のタルトゥース地域からの産品は、バニヤスやタルトゥースの港から、更にはレバノンのベイルート港から出荷されている。シリアからベイルート港への交易ルートは、ダマスカスのシリア政府が是非とも確保しておきたい交易ルートである。実際ダマスカスから地中海への製品輸送は、タルトゥースやラタキアよりもベイルートを中継港にした方がより速くより安く運ぶことができる。シリアがベイルートを手放せない理由がここにもある。

更にバスで進むと大きな像と病院が見えてきた。ガイドによれば、巨像は現大統領バッシヤール・アル＝アサド大統領の兄バースィルの像で、病院も彼の名前を冠しているとのことである。バッシヤールの父で前大統領であったハーフィズ・アル＝アサドは元々後継者としてバースィルを考えていたが、バースィルが 94 年に交通事故で亡くなると、その役割が政治的手腕は未知数のバッシヤールに回って来たという次第である。この国では、ハーフィズの銅像はどこでも見かけるが、バースィルの像は珍しい。現大統領バッシヤールにいたっては、ポスター等は見られても銅像は見かけない。ハーフィズの像は、ソ連崩壊後のレーニン像のように取り残されたように見えてどうも元気がない。他の社会主義国のオブジェのように戦闘的で勇ましい闘士の姿でもない。その権威主義的政治姿勢にもかかわらず、銅像の普通のおじさんらしいところが妙に親しみやすく同時にやや滑稽でもある。

アンチ・レバノン山脈を右手に見ながら、我々のバスは幹線道路から降りてマアルーアの町に到着する。急遽予定を変更してアンチ・レバノン山脈の溪谷にひっそりとたたずむこのアラム語を話す町を訪れたのは、イエス・キリストも話したこのセム語系の言葉を聞いてみたいとの願いからである。「ダニエル書」や「エズラ記」或いはタルムードの一部等がアラム語で書かれているし、「マルコによる福音書」15章34節にあるイエス最後の言葉「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」というアラム語の音写はあまりにも有名である。（他方、読者をユダヤ人と想定していた「マタイによる福音書」では、この箇所は「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」とヘブライ語で書かれており、詩篇 22 章 1 節の引用と思われる。）聖書ツアーの一行らしい欧米人観光客の姿も目に付く。マアルーアの町に入る直前にその全景を町の入り口から見上げようと

バスを降りると、計ったように1人の男の子が近寄ってきて、アラム語の歌を恥ずかしそうに歌い始めた。少年に所員の1人が僅かばかりのチップをあげて一同バスに乗り込むと、今度は町の上にある聖セルジウス修道院（アラビア語で聖サルキス教会）に向かった。正式には、聖セルジウス及び聖バッカス修道院と呼ばれる。シリア出身のローマ兵士であった2人は、キリスト教の棄教と偶像崇拜を拒否して皇帝マクシミアンによって処刑され、彼らを祀った修道院・教会がミラノ勅令（313年）とニケア公会議（325年）の間頃にこの地に建てられたのである。1732年以降はギリシア・カトリック教会のバシリウス救世主修道会(Ordre Basilien Salvatorien)の所有となっている。この修道会は、東方教会とローマ・カトリック教会の接点となるべく1682年にレバノンで設立されている。聖セルジウス修道院から狭い山峡を下るとパウロに従ったと伝えられる聖テクラの像と聖テクラ修道院に到着する。修道院上の洞窟にあるテクラの墓に向かって参道を進んでいると、スペインでよく見かける「モーロ人殺しの聖ヤコブ」(Santiago Matamoros)らしきモザイク壁画に迎えられる。イスラム教徒であるモーロ人（ムアア人）を足蹴にしている馬上のヤコブ像であるが、イスラム教の国でこんなものがあるはずもないと思ったが、マールーアの住民の大半はギリシア・カトリック教徒と聞いている。詳細に見てみるとヤコブ像ではなく、ドイツ等でよく見かける「龍退治の聖ゲオルギウスの騎馬像」のようだ。聖ゲオルギウスもスペインのカタルニアではサン・ジョルディと呼ばれ、レコンキスタのシンボリック的存在である。13世紀イベリア半島においてイスラム支配地の征服で活躍したハイメ1世は、サン・ジョルディ伝説のモデルとされているが、ここマールーアでも、反イスラムのシンボリックの聖人がモザイク像として祀られているのであろうか。それともあのモザイク壁画は、聖ゲオルギウスの騎馬像と類似しヨハネの黙示録を題材にした「聖ミカエルと龍」であったかもしれない。洞窟では、テクラの墓の前で老修道女が墓を守っていた。

### 3. ダマスカス

山中にあるマールーアから国道を下ると、1時間弱でダマスカスに到着する。まず高級住宅街や大統領公邸近くを通過して、町の北西にそびえるカシオン山に登る。ダマスカスの夜景を見るためであったが、丁度礼拝の時間にあたり、町のあちこちから流れるアザーンの合唱が山の上まで響いてくる。クリスマスの夜に、すべてを忘れアザーンの輪唱にしばし聞き入った。カシオン山は、旧約聖書の創世記4章に描かれた世界最初の殺人であるカインによるアベル殺害の現場とされているが、その真偽は明らかではない。英語圏の多くのキリスト教徒は、*my brother's keeper* の言葉で記憶している聖書の逸話である。そう言えば最近、*My sister's keeper* と題する映画があったが、カインの言葉を参考にしたのであろう。邦題は『私の中のあなた』。

山を降りると参加者の一部は、宿泊ホテルのシャーム・パレスの近くにあるヒジャーズ駅の見学に行った。ヒジャーズ鉄道はオスマン・トルコ帝国によって建設されたダマスカスとサウジアラビアのメディナを結ぶ路線である。イスラム教の聖地メッカやメディナへ向かうハッジ（メッカへの巡礼）のために建設されたのであるが、オスマン帝国のヒジャーズ（サウジアラビア西部でジッダを中心とした紅海沿岸地帯を言う）支配のためでもあった。オスマン帝国からのアラブ人独立を求めた所謂アラブ反乱時に、アラビアのロレンス率いるゲリラ勢力によって一部が破壊されたことでも有名である。イスラエルのハイファやシリアのボスラ、更にはヨルダンのアカバへの支線がある。ハイファへの支線は今では廃線となっている。現在はダマスカスから（ヒジャーズ駅でなくカダム駅から）アンマンまでのヒジャーズ・ヨルダン鉄道と、アンマンからヨルダン南部への路線であるアカバ鉄道が動いている。昔のエドムやモアブの地にはリン酸塩の鉱山が存在する。後述するペトラ遺跡からアンマンへの帰途に砂漠地帯を貫通する砂漠の道(desert highway)を車で移動していると、道の両側各所にリン酸塩採掘場であるボタ山が見えてくる。今でもリン酸塩の輸送には狭軌のこの鉄道が使われているとのことであり、鉄路が砂漠の道に沿って、そしてある所では交差して走っていた。鉄道建設時に枕木に使用されたのはレバノン杉であり、この鉄道建設が原因で、嘗てはレバノンの地に多く見られたレバノン杉の森も伐採によって跡形もないように破壊されたと聞く。

ところで、ヒジャーズ鉄道の他にもフランス権益による *Société de Damas-Hamah et Prolongements* がシリアで鉄道を運営していた。しかしこの鉄道の運営も 20 世紀当初には、ドイツ皇帝ヴィルヘルム 2 世主導の 3 B 政策によるイスタンブルとバグダッド間の鉄道敷設計画によって、危機的状況を迎えることとなる。1888 年にオスマン政府は、地中海から小アジアを横断してペルシアに至るルートを提案するフランス案よりも、ドイツのバグダッド鉄道案を選択する。フランスとしては、この新路線と既存のシリア国内路線を結びつけて中東地区の経済的覇権を握りたかったのであろう。一方オスマン側には、フランス案路線がトルコ民族の中心地たるアナトリアと結びつけられず、南部地域の開発に偏重していることに対する不満や、この路線がアラブ分離運動を促進する手段に使われるのではないかと危惧があった。そして何よりフランス案では、路線の終着駅の港が外国船舶によって支配される心配があり、そのため最終的にオスマン帝国は、イスタンブルーアンカラーバグダッドのドイツ案に傾いたと思われる。フランスは、シリア・レバノン地域にバイルートーダマスカス線、ダマスカスムゼイリブ線（ダマスカス以南の路線）、ラヤクーハマ線を持っていた。ドイツのバグダッド鉄道がシリア北部でアレppoとアレキサンドレッタ港と結合され、更にオスマン帝国支配のヒジャーズ鉄道と一緒になれば、フランスのシリア鉄道への打撃は計り知れないとの危惧がフランス側にはあった。実際ダマスカスムゼイリブ線に並行して、ダマスカスーダルアー線がヒジャーズ

鉄道によって建設されて、ダマスカスムゼイリブ線の収益が大きく落ち込んでいる。もちろんバグダッド鉄道はドイツの資金だけでは完成できず、フランスの出資も不可欠であったが、フランス側には出資だけして実際の権益はドイツに握られることへの不信感が消えなかった。このような疑念を払拭させたのは、第1次世界大戦でのドイツの敗北であり、以後フランスはこの地域での権益確保に走ることになる。

翌朝はダマスカスの国立博物館から調査が始まった。パルミラから 80 キロ地点にあり、ウマイヤ朝時代の戦略的要所であったカスル・アルヒーラから移設した門柱が、博物館の入り口にそびえたち威容を誇る。展示物の中では、先述のウガリット出土のアルファベット粘土板や、イラク国境地帯にあるセレウコス朝が築いたドゥラ・エウロポス遺跡からの出土品や移設されたシナゴグの壁画は圧巻であった。現在ドゥルーズ教徒が多く住むシリア南部の町シャハバ出身のローマ皇帝ピリップス・アラブスの時代（244～249年）に、ドゥラ・エウロポスに住んでいたユダヤ人家族によって住居からシナゴグに改築されたと言われている。国立博物館調査を終えて、バスで聖パウロ教会(Bab Kissan)に向かった。新約聖書「使徒の働き」第9章によれば、これまでのキリスト教徒迫害者の立場から回心しイエスが神の子であると宣教していたパウロが、ユダヤ教徒からの迫害

を逃れて夜中にかごに乘せられ町の城壁伝いにつり降ろされた場所と言われている。教会は現在ギリシア・カトリック教会によって管理されている。正門の上にパウロが吊り下げられたと言われる窓があるが、その両側には「キー・ロー」のモノグラム（所謂ラバルム）がある。門の左の小さな広場にはパウロ落馬の像があるが、落馬の様はやや滑稽であり信仰心をそそるような描写にはなっていない。ダマスカス郊外のダラヤの村で起こった出来事を題材にして作られた像であるが、ヴァチカンのパオリーナ礼拝堂にあるミケランジェロの『サウロの回心』や（これには、同じ作者の『最後の審判』をも彷彿とさせる構図とダイナミズムがあ



写真1 バブ・キサン横のパウロ落馬像

る)、ローマのサンタ・マリア・デル・ポポロ教会のチェラージ礼拝堂にあるカラヴァッジョ作『聖パウロの回心』の迫真の画面と比べると、こちらは緊迫感がなく何とも間抜けなパウロである。

ところで、ルカの執筆と言われる「使徒の働き」の記録では、ユダヤ人達に追われての逃走劇について、パウロはこの追手を自身の著作「コリント人への手紙 第2」の中ではアレタ王の代官であったとしている。これはおそらく同じ事件への言及であろうと考えられるから、ユダヤ人はアレタ王の代官を巻き込んでパウロ追跡を行ったと想像される。アレタ王とはアレタス4世のことで、ナバテア王としてペトラから北はダマスカス地域をも勢力下に置いていた。ナバテア人の地ペトラにはこの後言及するが、このアレタス4世の娘は、ガリラヤ地方から今のヨルダン北西部の地方を支配していたヘロデ・アンティパスに嫁いでいる。アンティパスは、「マタイによる福音書」2章に出てくるイエス誕生の頃ユダヤを支配していたヘロデ王の息子である。有名な歴史家フラウィウス・ヨセフスの『ユダヤ古代誌』によると、ヘロデ・アンティパスはアレタス4世の娘と離婚して自身の異母兄の妻ヘロディアスとの結婚を進めようとしたため、それを知ったアレタス4世の娘は父に状況を訴える。そこでヘロデ・アンティパスとアレタス4世は戦争になり、結局ナバテア軍の前にアンティパス側は敗退する。「マルコによる福音書」の記述では、このようなアンティパスの行為を批判したのがバプテスマのヨハネであり、彼の首はヘロディアスと彼女の娘サロメの所望するところとなった。ヨセフスは、アンティパスの対ナバテア戦役での敗退を、ヨハネへの仕打ちに対する神の懲罰であるとユダヤ人達が噂していることを記している。更に、詳細ははっきりしないが、パウロを捕らえようとしたのもこのアレタス4世に仕える代官であったとパウロ自身は証言しているのである。ところで、「ガラテヤ人への手紙」1章でのパウロ自身の証言では、パウロは逃走劇の直後にエルサレムに上らず、3年程アラビアに出て行ったとある。アラビアとは色々議論があるが、ナバテア人の土地との説が有力視されている。

次にバスはバブ・シャルキ(Bab Sharqi)に向かった。パウロの回心で有名な「まっすぐな道」の東の端の門がある。門をくぐってすぐに右折すると、しばらくして聖アナニア教会が見えてくる。「使徒の働き」の記述では、アナニアはイエスに遣わされてサウロ(パウロ)が留まっている「まっすぐの道」にあるユダの家を訪ねる。サウロの上に手を置いて祈ると、サウロの目から鱗のような物が落ちて目が見えるようになるという有名な話である。サウロが洗礼を受けたのは、旧市街の北の城壁を東西に流れるバラダ川であったとの言い伝えがある。一方ユダの家は、バブ・シャルキを入れて左側にあった。現在のアナニア教会は、当時アナニアの家があった場所であると言われており、地下の礼拝堂の祭壇背後にはパウロの回心を描写した素朴な数枚の絵が飾られ当時の様子を伝えている。「まっすぐな道」は確かにまっすぐに伸びた公道であ



るが、車の交通量が多くやや興ざめである。道の両側には商店、土産物店或いはレストランが並び、1世紀どころか中世や近世初期の面影もない。途中のローマ記念門が数少ない歴史的建造物である。

ローマ記念門から路地を抜け、歴史的建造物でもあるカフェ・レストラン「ジャブリー・ハウス」(Beit Jabri)でシャイを飲んだ後、更に路地を進んでウマイヤド・モスクに到着する。入口で靴を脱ぎ、女性は再度ねずみ男に変身。インドのデリーへの総合研究旅行で訪ねたジャマー・マスジッドの大モスクより、モスクとしては美しく感動的である。ウマイヤド・モスクの前のスーク・ハミディーエも雑踏の中に整然さがあり、ジャマー・マスジッドからチャンドニー・チョウクの大通りに至る路地で見られる雑踏の大混乱はない。モスク内部の大理石のフロアを持つ中庭に入ると、列柱で支えられた時計ドームと宝物ドームの見事さに圧倒される。時計ドームには、名前の通り嘗てモスクの時計が保管されており、宝物ドームには、公金、モスクのお金、スルタンの重要文書等が収められていたと聞く。列柱にはビザンチンやローマの時代の柱も使われているようである。中庭のメッカ側(南側)には、礼拝ホールの大きな門があり、その上部に建てられたアル・ハラム・ファサーダの装飾は、イスラム建築らしくないモザイクのパネル装飾で飾られている。「天国の絵」と言われているそうであるが、そこには木々や建物が描かれている。礼拝ホールのクーポラがその上に突き出ているように見え、ファサーダだけでも一つの建造物のようにも見える。

礼拝ホールに入ると、ちょうど礼拝の時間も終わりに近く、メッカに向かった前の方に男性



写真2 ウマイヤド・モスクのアル・ハラム・ファサーダ



写真3 ウマイヤド・モスク内部、礼拝直後の女性席

が集まり、ホールの真ん中を挟んで後の方で女性達が祈っていた。我々異教徒は礼拝が終わるとホールのフロアをぶらぶら見物するわけであるが、先ず故ヨハネ・パウロ2世もお参りしたバプテスマのヨハネの首が収められていると言われる長方形型の廟を見学。男性と女性はこの首塚をそれぞれ反対側から見るべきであるのだが、要領を得ない我々は、男性側（南側）から女性達が廟の内部を見入ったり、男性がアラブ女性に混じって反対側から覗き込んだりと顰蹙物であったのだが、一般の印象とは違いモスクは見学においても結構寛容である。礼拝ホールの外に出て、今度は開祖ムハンマドの孫でアリーの息子にあたるフサインの廟を訪れた。ウマイヤ朝軍にイラクのカルバラーで敗れ殉教したフサインの廟はカルバラーにもあるが、ここダマスカスのウマイヤド・モスクにも多くのシーア派教徒が訪れ、フサインの廟に詣でる。チャードルを着たイランからの女性達で一杯かと期待したが、彼女達には結局ここではお目にかかれなかった。ここは基本的にはスンニ派のウマイヤド・モスクであり、たとえイスラム教徒にとってもヤフヤーと呼ばれる預言者であったとは言え、キリスト教徒が崇めるバプテスマのヨハネの廟をモスクの礼拝ホールの真ん中に置いたり、シーア派のフサイン廟をモスクの中に安置したりと、このところ偏狭な原理主義者の研究をしてきた筆者にはこの国のスンニ派 Muslims の寛容さには驚かされる。ウマイヤド・モスクは厳粛な雰囲気もあるが、生活の場でもあるためか中庭等は開放的で散策の場でもある。若い娘達が雑談にふけり、子供達は走り回っている。一端外に出てモスクの北門近くにあるサラディーン廟を訪れる。十字軍に連戦連勝を重ねたアラブの英雄であり、詣でるイスラム教徒の観光客も一見誇らしげである。

ウマイヤド・モスクの前には、小振りながらローマ期のゼウス（ジュピター）神殿の門が残されている。その遺跡の下にも土産物屋の露店が店を出し、遺跡の南に広がる新京極もどきのスーク・ハミディーエによって遺跡の下層部分が侵食されたかたちである。宗教施設モスク、ローマ遺跡、商業地区スークの3つが混在する面白い空間であるが、何せ人が多く嘗ての「銀ブラ」とはいかない。先述したように、スーク・ハミディーエもゴールド・スークも、どの国でも見かけるいかにも中国製品ですよ、安いですよと言わんばかりの店で溢れている。それを求めての買い物客の流れで身動きが取れないところもある。しかし迷路のような路地をうろつくと、スパイスやナッツ等を売る地元密着型ながら旅行者も十分楽しめる路地に出くわす。ウマイヤド・モスクの南に建ち、嘗てのダマスカス総督アッサード・パシャ・アル・アゼムの邸宅で、今は民俗博物館となっているアゼム宮殿を訪れた。建物や中庭等は18世紀半ばの建造物であるが、1925年の抗仏反乱の際の火事で大きく損傷したが、その後見事に修復されている。観光客がいなければ、スークの雑踏から逃避できるオアシスとなる。

夕方になって、ダマスカスでは高級と言われるレストラン「ナーランジ」へ向かう。このレストランで、広島市立大学からダマスカスに來られ現在ダマスカス大学文学部の客員教授をしておられる宇野昌樹先生にお会いし、シリアやダマスカス事情を色々とお聞きした。レストランでの歓談後場所をホテルの喫茶室に移し、旅行参加者数名と先生を囲んで更にお話を伺うこととなった。参加者のひとりI所員と宇野先生は水煙草を楽しみながらの一時となった。I氏によれば水煙草はニコチンがないため愛煙家にはやや物足りず、まあ香を楽しむ程度であろうとのこと。もちろん禁煙者にとって煙は煙。香のような匂いは、パイプ煙草をふかす人の隣にいるようであるが雰囲気は実に良い。高級レストランにおいても、普通に水煙草を楽しむ紳士諸君に今回何度も出くわしたが、本来は庶民が通うマクハーで試してみたい。

#### 4. ダマスカス途上のパウロの「回心」とパウロ神学

ダマスカスの話を終える前に、ダマスカス途上でのパウロの回心の意味を考えてみたい。あの一瞬の出来事がその後のパウロの新約聖書書簡の内容を決定付け、その後のキリスト教世界に多大な影響を与えている。著名な聖書学者キュンメル(W. G. Kümmel)やヘンヒエン(Ernst Haenchen)が言うように、「使徒の働き」の著者ルカが、9章、22章、26章と3つの章にわたってパウロの回心に言及していることは、この事件の重大性を示している。パウロの回心を扱った書籍は数え切れないが、しかしその回心の真相や背景となると歴史上様々な解釈がなされてきた。一般にキリスト教徒は今日でも、ダマスカス途上でのパウロの回心をキリスト教徒の回心の原型と考えている。回心には漸次的なタイプと急激なタイプの2つがあるが、パウロの回

心は後者の好例である。自分の心の中を内省的に見つめ罪の意識に悩み義なる神に恐れおののく姿は、マルティン・ルター等多くのキリスト者の回心に見られた現象であるが、彼らはその中からルターが主唱するように「信仰による義」に目覚めて回心してきたのである。パウロの書簡にもヘレニズム的ユダヤ人としての自分のアイデンティティに悩む姿が告白され、主の劇的な介入によって急激な回心を果たしたパウロは正に回心の模範である。「行いによってではなく、信仰のみによって人は神の前に正しく立つことができる。」との考え方は、長い間西欧の保守的キリスト教会で教えられてきて、「正統な」プロテスタンティズムの回心パターンと見なされてきた。しかしこのような個人の信仰の問題として「神の義」を解釈する方法には、近年ハーバード大学の神学部長も務めたステンダール(Krister Stendahl)やデューク大学のサンダース(E.P. Sanders)等によって疑問が提示され、これまで受け入れられてきたパウロの回心が意味するところも、根本から問い直されることとなった。

このようなダマスкас途上の出来事に関する「新しい見方(new perspective)」は、パウロの「回心」よりはパウロの「召命」を強調し、神の義よりはパウロの異邦人宣教を重視する。即ち、パウロの回心を個人の救いのプロトタイプと見てきたこれまでの解釈史の流れを、ステンダールやサンダース等は断ち切ったのである。これまでもパウロの回心については様々な解釈がされてきた。2世紀半ばに現れ異端の嫌疑をかけられたマルキオンは、パウロ解釈に関しては超パウロ主義者とも言える程に、旧約聖書の神を不完全な神として斥け、キリスト教の中のユダヤ教的要素も排除しようとした。それに対しサンダース等は、逆に回心パウロのユダヤ教的側面を評価する。しかし、このような見解はマルキオンから見れば対極に位置する。当時マルキオンは、ユダヤ主義を完全に無視する立場に立ったのである。西欧においては4世紀から5世紀にかけて活躍したアウグスティヌスの解釈も、その後のパウロ神学の展開にとって見過ごせない。神がダマスкас途上でパウロに対して行った神秘的且つ激しい贖いの行為は、そのような恩寵の行為にパウロ自身は全く値しないし、またそれを拒否する選択肢もないままに、一方的な神の恩寵の行為としてなされたとするのがアウグスティヌスの見解である。パウロ個人の意志を押し折った神の一方的恩寵は、アウグスティヌスがパウロの回心劇に見出したものと同じであり、ミケランジェロに代表されるこのテーマを扱った絵画に象徴的に表現されている。中世後期のパウロ回心の解釈は、神の一方的恩寵により高慢な罪人の意志が消滅したことに主眼があり、その後ルター期以後のプロテスタンティズムが陥る悩める人間の内省的良心の呵責のレベルの議論とは大きな隔りがある。

おそらくプロテスタンティズム救済論に最も影響を及ぼしたルターの回心の軌跡は、パウロのダマスкас途上の経験と類似して、テューリンゲンの森での雷光の嵐の中で始まる。雷に代表される神の裁きに恐れを抱いたルターは、聖アンナに助けを求め修道士になることを誓う。

しかしエルフルトのアウグスティヌス派修道院での生活も苦悩の日々であったが、有名な「塔の経験」(Türmerlebnis)で「ローマ人への手紙」1:17にある神の義(dikaiosynē theou, δικαιοσύνη θεοῦ)の解釈で目が開かれ、ルターの経験は歴史上その後の救済論に一石を投じることとなる。神の義を罪人に罰を下す義なる恐ろしい神と理解し、良心の苦悩で恐れおののいていたルターは、パウロの書簡のこの箇所、神の義とは義人が神の賜物、即ち信仰によって生きることであるとの理解に達し、「信仰による義」の概念の普遍化に寄与する。ルターはパウロの回心に関して説教する場合でも、回心(Bekehrung)という言葉の使用は避けていることを考えると、ルターはパウロの回心自体にはそれほど興味がないようである。その理由としては、ルターがパウロの回心を心の内的変化よりは「新しい見方」の考え方に沿って召命と理解していたからだと考える研究者もいる。しかし実際は、ルターやカルヴアンが回心よりは「過去の罪に対する悔恨(repentance)」やその後の信仰に関心があつたことに起因すると考えるべきであろう。換言すれば、パウロのダマスカス途上での回心劇には見られない、自身の内省的心の洗い流しによる回心前の心の準備期間の必要性の議論をルター等の宗教改革者は見て取ったのである。このような準備期間をその後更に強調したのはピューリタンであった。イングランドやマサチューセッツ湾植民地のピューリタン教会では、内省的瞑想(introspective meditation)の期間を取り入れることでパウロの回心を理想とは考えなくなった。ジョン・バニアンJohn Bunyanの自叙伝 *Grace Abounding* 等はその代表で、その後アメリカでは福音主義の大覚醒時代を通して、福音受容前の罪の自覚の重要性が強調されることとなり、その点では今日の福音派も基本的に変わらない。しかし、パウロは自身のダマスカス途上の出来事に触れるときに、悔恨(metanoia, μετάνοια)とか回心(epistrophē, ἐπιστροφή)のような言葉は使っていない。

このような誤解の背景には、これまで義 δικαιοσύνη という言葉が持っていた幾つかの言語上の問題があった。一つは英語においてこの語は、同源語として動詞(δικαίωω, dikaiōō)の訳 justify と名詞(δικαιοσύνη)の訳 righteousness が異なり、読者に不必要な混乱をもたらしてきた。更に義という言葉のギリシア的概念とヘブライ的概念の間の相違にも注目する必要がある。ギリシア世界で義とは、個人や個人の行動が測られる考えや理想のことと理解されるが、ヘブライ的感觉では、個人がその所属する関係によって課されている義務をいかに果たしたかが議論される。ルター以後のプロテスタント世界や英語圏ではギリシアの意味でこの言葉が理解され、個人の行動や心の内面を探る行為に議論が凝縮されてきた感がある。他方パウロが意図した義とは全くヘブライ的意味においての義であり、神の義とは神がイスラエル或いはイスラエルの民に約束したことに對していかに忠実であったかというレベルで理解される。パウロの回心の重要性は、正にこのようなイスラエルに対する神の約束が、キリストの到来で異邦人をも含む形で成就することを理解したことにある。パウロはユダヤ教の律法そのものを批判してキ

リスト教の対極にユダヤ教を置いたのではなく、神の恩寵や契約の義はイスラエルにのみ付与されたものであるとのユダヤ人の偏狭さに異議を唱えたと解釈される。

そもそも信仰と律法を対比させるルターの発想は、聖書の誤訳から発している。ルターが最も重視したパウロ書簡の一つ「ガラテヤ人への手紙」では、2章16章に「人は律法の行いによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる」とある。この新改訳聖書の翻訳自体ルターの誤りを踏襲している。「キリスト・イエスを信じる信仰によって」とは元々 διὰ πίστεως Ἰησοῦ Χριστοῦ の訳であり、ルターが *durch den Glauben an Christus Jesus* と訳して以来この箇所は、福音派教会を含めたプロテスタント教会でも *by faith in* (或いは *through*) *Christ Jesus* と目的語属格として解されてきた。英語聖書訳の例外は1611年の欽定訳で、そこでは *faith of Christ* と主語属格として訳されている。ルター以前の聖書は、ブルガタ版(*fide Christi*)も含め主語属格で統一されており、このような解釈の方により説得力がある。ルターによれば、人はキリストへの信仰によって義とされるのであるが、信仰も突き詰めれば行いの一種であり、壮大な神の恩寵のキリスト論的な議論を、信仰という個人の内面に立ち入った *anthropological* な議論に矮小化したと批判されても仕方がない。

その後18世紀の啓蒙思想の理性絶対主義の時代になると、懐疑主義的解釈に押されてパウロの回心劇の超自然的性格が除去されていく。このような合理主義全盛期の聖書批評学の影響で、パウロの回心劇は幻覚、てんかんの発作、雷光の力等自然界の現象で説明され、この時のパウロは理性を発揮する状況にはなかったと理解された。ダマスカス途上の出来事における奇跡は否定され、復活のキリストを見たパウロの回心は、実はパウロの主観的な思いが神秘的に対象化された結果であると解釈された。このような理性中心的パウロ解釈に異議を唱えたのはカール・バルトである。パウロの回心劇におけるバルトの解釈を評価する動きは、ダグラス・ヘイリンクの *Paul among the Postliberals* 等の著作で詳述され注目されている。

パウロの経験を単に召命の観点から捉えることに対しては、パウロが回心によって自身のユダヤ人としての過去を否定していることや、回心という言葉は使われていないもののパウロが過去からの大きな転換を経験していることから、適切な解釈ではないとする意見もある。しかし、ステンダールやサンダース等の「新しい見方」が、パウロの異邦人伝道理解に新しい息吹を吹きかけたことは事実である。パウロは、ユダヤ人と異邦人の違いが決定的である世界で育ったが、ダマスカス途上で回心によって、キリストにあってはこの違いが存在しないことに気付く。ユダヤ教「本流」のエルサレムではなく、トルコ南部タルソ出身のパウロが当地で身につけたユダヤ教はヘレニズムの影響を受けたものであったと言われているが、そのことがパウロをして異邦人伝道に駆り立てたのかどうかは判らない。ヘレニズムの内容や解釈上の立位置の違いはともかく、このような考えは、パウロが出身地の小アジアで置かれた歴史的状況、即

ち社会経済的条件の中にパウロを位置付けることが重要であるとする故土井正興先生の史的唯物論的言説にも通じるものがある。回心前のパウロの心の中に、ヘレニズム系ユダヤ教の普遍的性質と、律法(Torah)を基礎にしたエルサレムの「本流」ユダヤ教の排他主義が同宿し、パウロ自身その相克に悩んでいたとの解釈もある。(パウロは厳格なパリサイ人であった父の影響もあり、幼少期にイスラエルで有名なラビであったガマリエルから律法の教育を受けている。)このような解釈は、ダマスカス途上での回心によって、パウロが前者の普遍主義の正統性に目覚めて異邦人伝道を志すことになったとの理解に通じる。一方、ダマスカス途上の出来事をパウロの回心よりは召命の方向で理解するサンダース等の立場は、パウロの異邦人宣教の関心はパウロのダマスカス途上体験の一部を形成するとの考え方であり、パウロの異邦人伝道は彼がユダヤ教の律法トラを完全に払拭した結果であるとの理解と真っ向から衝突する。ここにはルター流の「信仰 vs. 行い」の議論、更にはキリスト教対ユダヤ教の二律背反的理解を矯正しようとの強い意図が見られる。

「新しい見方」が提示される前にも、ユダヤ教学者の間では既に 20 世紀当初よりパウロの議論に対する不満が燻っていた。上述のようにルター等の影響を受けて、パウロ神学理解では信仰が異常に強調され、行い(律法)を重視すると見られたユダヤ教の体質が、近世初期以後少なくともプロテスタント世界では厳しく断罪されてきたからである。これに対してユダヤ教学者は、パウロの信仰と行いの対比の議論に対しては、ユダヤ教の律法と神の恩寵が対立概念でないことを強調する。ユダヤ教が律法を守るのは、それによって神の好意を得るためではなく、与えられた神の恩寵に対する応答としてである。「新しい見方」は、このようなユダヤ教学者からの批判にも十分に対応したものとなっている。ダマスカス事件後のパウロを、ユダヤ教徒としてのアイデンティティを放棄した者として描写するのではなく、ユダヤ人の使徒として、イスラエルに対する神の約束と最終的救済が、キリストの到来で異邦人をも含む形で成就するとのメッセージをパウロは伝えたかったと「新しい見方」は主張する。信仰対律法という従来のプロテスタント教会の二律背反的解釈ではなく、これまでのイスラエルに対する神の恩寵と約束が、キリストの到来によって新たな局面を迎え、異邦人をも含有する形で継続されていくというのがサンダース等の見方である。換言すれば、パウロの異邦人宣教の関心は、ユダヤ教の排他主義を捨てた結果生まれたのではなく、ユダヤ教のある種の普遍性を適用した結果であるとの解釈である。

## 5. ボスラ遺跡からジェラシュ遺跡へ —シリアと国境—

翌朝 6 時半にダマスカスを発ち、シリア南部のボスラ遺跡に向かう。国道を南下した後国境

近くで幹線道路を降り、東へ向かってボスラに着く。バスの駐車場近くまで狭軌の鉄路が敷かれている。廃線かと思いきやガイドの話では今も列車が1日2本ぐらい走っているそうだ。これがヒジャーズ鉄道の支線であろうか。ドイツ人グループと一緒に、アイユーブ朝時代に造られた城砦シタデルによって囲まれたローマ劇場跡に入る。ローマ劇場はこれまで様々な国々で見てきたが、37段のすり鉢状のこの黒っぽい半円劇場が保存状況が一番良い。この劇場では、北島三郎が日本人としては最初に熱唱したとの話である。日本・シリア友好協会の主催で開催された音楽祭で「与作」を歌ったとのことであるが、音響がよくサブちゃんのこぶしがよく響いただろうと想像する。しかし、演歌とローマ遺跡のミスマッチはどうしても否めない。ボスラには、この日の午後ヨルダンで訪れるジェラシュのように洗練された観光地としての様相はない。遺跡のハンマーム跡に道を隔てて建ち今もモスクとして使用されている建物は、オマー・モスク（現地の人はジャミ・アル・アルスと呼ぶ）と称されるが、建物自体はどう見ても教会である。ビザンチン教会跡を使ったとされ、教会の塔をミナレットに見立てているのである。このように遺跡の一部にあるモスクを今も使用していることが物語るように、遺跡には今も住民が暮らしており、遺跡の隣に居住空間があったりして遺跡の保存状態にはやや問題がある。しかし逆に、観光地化した遺跡と違い、居住民の匂いが遺跡の周辺に漂い遺跡自体に妙な生活感が感じられる。地元住民も手作りの土産物を家の前に並べたりしているが、商品はやや粗悪であり、本人達もそれらをしつこく売る気はないようだ。今回のシリア・ヨルダンの旅で気付くのは、物売り達の淡白さである。「ワンダラー、ワンダラー」と値段を連呼するだけで、しつこく売ろうと詰め寄ってくることはない。これまでの総合研究旅行で出くわした洛陽の龍門石窟やインド、東南アジアの一部諸国の押し売りまがいのやる気満々の売り子とは、持っている遺伝子自体が違うらしい。

ボスラを後にして国境の町ダルアーを通過し、すぐ南の国境の検問所に向かう。ダルアーはこの辺りの商業中心地であり、どこから人が集まってきたのかと思うぐらい買い物客等でごった返している。ヒジャーズ鉄道のボスラ線やハイファに行く支線の分岐点でもあった町である。シリア・レバノン国境は現在のところ政治問題はないが、経済的問題（物価水準の違い）の故に国境通過に時間がかかる。トラックや乗用車が、たくさんの物資や製品を満載してシリアの出国許可を待っていた。物価の安いシリアからの物資の流れが作り出す車の列であろうか。我々も物価高のヨルダンを前にして、自衛手段としてビールやワイン等を買って来た。一般に禁酒のイスラム圏でお酒は驚くほど高価である。ヨルダンのバーやレストランでは、ビール1パイントが10ドル程度と聞いていたので酒飲みは必死である。出国手続きはアレppo到着時の書類に不備があるとかでいちゃもんをつけられ手間取ったが、官憲との議論の末に規則通りの出国税1人500シリア・ポンドを支払って出国許可が出た。



官憲との議論の他に、シリアのガイド君ともチップを巡って一悶着あった。チップとは、本来相手のサービスの度合いに対する心づけである。だから義務ではない。しかし、この辺りではガイドや運転手のチップの相場が一応確立している。これまで人文研旅行で訪れたどの国々よりもチップに対する期待度が大きい。このガイド君のガイドとしての資質や働きには参加者の多くが疑問を感じており、出国時の不手際等を考えるとチップなる謝金には全く値しないというのがこちらの判断であった。一般に物価水準の高いヨルダンのチップ相場はシリアより高い。レバノンもヨルダンと同レベル、イスラエルは両国よりもやや高い。イスラエルではチップを払わない団体に対して、出国手続きの手配を拒否したガイドがいたという話も聞いた。一応添乗員の役割を負わされている筆者が、総合研究旅行のたびに悩むところである。旅費に含まれているサービス料とそうでない部分の区別、各国のチップ事情の違い、ガイドと運転手の取り分の割合（両者の力関係と親密度）等考慮する点は多々ある。しかし、基本的にはあくまで心づけである。ガイドとして基本的な働きを十分に果たしたか、こちらの多種多様な要求（訪問地の選択やその急遽変更、食事等人文研の要求項目はいつも多い）にどれだけ気持ちよく答えてくれたか等が採点基準である。しかし何よりも重要なのは、単なるサービス提供者と受益者という無機質な関係ではなく、我々参加所員との人間関係が構築できたかということであろう。

シリア出国にあたり、シリアの周辺諸国との関係に言及したい。シリアはアメリカにより1979年12月にテロ支援国家の指定を受け、現在その指定を受けているキューバ、イラン、スーダンを含めた4カ国の中では最も古くからの指定国家である。カダフィのリビア等がテロ支援国家の指定から外れる中で、アメリカにとってシリアがいかに面倒な国であったかを示している。シリアもアメリカを中心とした西欧諸国の経済援助や融資の停止、武器輸出禁止等に耐え、1980年代以後起こる諸問題に対しても、ハーフィズ・アル＝アサドは巧みに対応し困難な状況を乗り越えたと言えよう。武器供与を続けた同盟国ソ連の崩壊や、経済低迷、政治不安はもちろんのこと、この時期イスラエルとの軍事力の格差は益々拡大したと考えられる。1982年、ベイルートでのヒズボラ主導の自爆攻撃事件でアメリカ海兵隊員等242名が死亡すると、アメリカとシリアの関係は急速に悪化するが、89年のタイフ協定(Taif Accord)による停戦によってレバノンにおけるシリアのプレゼンスが認められる。更にハーフィズは、1991年の湾岸戦争において反イラクの立場を明らかにし、湾岸諸国やアメリカの支持を取り付ける。即ちこの時期シリアは、対外関係において一息つけたと言えよう。2000年のハーフィズの死後政権はバシール・アル＝アサドによって引き継がれるが、2006年のヒズボラの国境侵犯攻撃やイスラエル軍兵士誘拐に反応して、イスラエルはヒズボラと開戦、続いてレバノンに侵攻する。このヒズボラ・イスラエル戦争の顛末は停戦後も中東に暗い影を残し、いわばイランーシリアーヒズボラーハマス同盟ができ、イスラエルとアラブの和平交渉は暗礁に乗り上げた感がある。ヒ

ズボラの武器や資金はイランから主に提供されたものと聞くが、シリアもイスラエルに対抗するこの地域の盟主として名を上げた印象がある。アラウィ派バアス党政権は、シリア社会主義と汎アラブ民族主義の統合を目指し、長らくイスラム宗教との関係は曖昧であった。しかしここに至りバッシュールは、少なくとも対外的には、アラブ民族主義とイスラム法(シャリーア)に基づくイスラム国家建設を目指すイスラム主義の統合の推進者との印象を与えている。スンニ多数派に対する少数派として宗教に関しては曖昧な路線を維持してきたアラウィ派は、これまでイスラミストの中では比較的穏健なムスリム同袍団でさえ迫害の対象にしてきた。しかし、急進的イスラム原理主義のイランとはある程度距離は置きながらも、その後イスラム主義への理解の姿勢を示している。特に海外において、シリアは急進的イスラム主義者を支援する方向性を明確にしているのである。換言すれば、シリアは国内においてイスラム主義革命論者を押さえつける一方で、外国においてはイスラム主義者の大義を支持していることになる。国内的には、イスラム主義者と改革派のバランスをとっているようで、改革派に対しては、現政権批判をすればイスラム主義者を利するだけであるとの考えを植えつけようとしているかのようである。

各国との関係に目を移して、先ずはレバノン関係であるが、シリア軍は 2005 年にレバノンから撤退を余儀なくされている。しかし、ヒズボラを通じてその影響力は行使されており、戦略的にも経済的にも、シリアにとってレバノンは歴史的に切っても切れない関係(historical indivisibility)にある。例えば、レバノンはシリアで増大する余剰労働者に対し十分な雇用機会を与えている。シリアでの我々の調査中も、シリアの人達との狭い交流範囲の中ではあったが、今誰々がレバノンに行っているとの話をいくつか聞いたことがある。実際今から 5 年ほど前の統計だが、シリア人の出国数は、レバノンへの出国が全体の半分ぐらいを占め、続いてサウジアラビア、トルコと続く。逆に観光客はイラン人が 2 位のフランス人を大きく引き離している。ところで、人口の 4 分の 3 以上を占めるスンニ派は 1 割程度のアラウィ派を正統なムスリムとは認めておらず、両者間には時々軋轢がある。アラウィはラタキア地方に集中し、「アリーに従う者」の意である。シーア派の流れに属すると言われるが、独特の教義を持ち神秘主義的側面を持つ一方で宗教を統合的、階層的に見る傾向がある。即ち、宗教は人類が神の言葉を受容できる準備度に応じて段階的に啓示されるとする。ある人々は他の人々よりも神の言葉を受け入れる準備ができていう意味での宗教の階層的な理解なのである。また例えば、キリスト教起源の習慣をも取り入れたりする点で統合的でもある。このような少数派アラウィとシリアのスンニ多数派との間、更にはアル＝アサドの親衛隊とムスリム同袍団の過激派との間には大きな溝が存在する。アラウィ派現政権は、シリアにおいては何とかスンニ多数派を懐柔したりして抑えているのだが、最近でも 2008 年には北レバノンのトリポリで両派の衝突があり死傷者

も多数出た。レバノン首相であったラフィーク・ハリリーは、スンニ派に属しシリア軍のレバノン撤退を求めているが 2005 年に暗殺されている。その背後にシリアのアラウィ派バアス党政権の存在があったと言われており、アメリカ国務省は、シリアに対して今でもそのような嫌疑をかけている。2005 年のシリア軍のレバノン撤退は、ハリリー暗殺に対する国際的圧力がその背景にあったと理解されている。もっともらしい話だが、この地域での和平が成立し徹底的な経済改革が断行されると、最も利益を得るのはスンニ派の商業関係者であり、それがアラウィ派政権の選択肢から和平の道を遠ざけているとの解釈もある。いずれにせよ、シリアにとってレバノンは心底では大シリアの一部なのである。その点では、パレスチナやヨルダンも同様であるが、現実的にシリアにとって最も影響を及ぼし易いのはレバノンである。しかし、レバノンにはマロン派等の抵抗があり、パレスチナ民族解放戦線(PLO)のパレスチナ民族主義やその他地域のイスラム主義等が、そのようなシリアの願望の前に立ちはだかることは言うまでもない。

今回の旅で最も関心があったのは、訪問国であるシリアとヨルダン・ハシミテ王国との関係である。第3次中東戦争以後、アンマンに拠点を置きイスラエルへのテロ攻撃を行っていたパレスチナ解放機構 PLO とヨルダン国王フセイン 1 世との間で 1970 年にヨルダン内戦（所謂 **Black September**）が勃発すると、シリアのヨルダン内戦への介入が懸念された。結局シリア・バアス党内の内紛（その結果ハーフィズ・アル＝アサドがサラー・ジャディドから党内権力の奪取に成功）が原因か、シリアがイスラエルの軍事介入を恐れたのかは判らないが、シリアの内戦介入は回避される。PLO のアラファト議長にとっては、ジャディドの失脚は大きな痛手であり、停戦直後のナセル・エジプト大統領の死去はダブルパンチであった。ナセルを継いだサダト大統領は国内問題の処理に専心し、PLO 支援に積極的ではなかったからである。この内戦の結果 PLO はレバノンの地に追放され、ヨルダンはイスラエルの和平交渉のテーブルにつくことになるのだが、当時シリアがヨルダン支配に関心があったことは事実であろう。その後も 80 年代初めから半ばにかけて、シリアはヨルダンの要人殺害等に関与したとされる。現ヨルダン国王アブドゥッラー2 世の時代になって、両国の関係はかなり改善されたと聞く。両国は近代化のスピードにおいて大きな違いがある。日本から持ち込んだ海外ローミング対応の携帯電話がシリアでは殆ど通じなかったのに、ヨルダン入国を果たしたと同時にこれまで表示されなかったメールが一度に入ってきたと旅行参加者の 1 人は驚く。テロ支援国家の指定でアメリカの政府開発援助が受けられない中で、日本はシリアの二国間援助のトップドナーの地位を長らく占めていたのであるが、情報分野の支援も今後見逃せない。但し、そのためにはシリアの政治的基盤整備が必要であろう。シリアで携帯電話事業を担っているのは **Syriatel** と **Investcom** の 2 社であるが、前者の契約に関してはアサド・ファミリーの利害が大きく絡んでいたとのア

メロカ側の報告もある。

次にシリアの領土問題に関して考えてみたい。先ず第3次中東戦争で失ったゴラン高原の奪還については、その実現可能性はさて置いて、シリアにとって妥協の余地はない。今回訪れることはできなかったが、ゴラン高原の非武装地帯にある村クネイトラは、イスラエル軍の爆撃で破壊されイスラエルの残虐行為の象徴としてシリア政府によってそのまま残されている。このような村や、映画『シリアの花嫁』でも取り上げられた占領地に残されたシリア人の悲劇は、今後も長らく続きそうである。イスラエルとの軍事力の差異から判断して、シリアが軍事行動で奪回を試みるとは考えられず、イスラエルもゴラン高原の戦略的、水源としての経済的重要性からしてそれを手放すとは考えにくい。ゴラン高原からは地中海に至るまで緩やかな下り坂で、もしこの地をイスラエルが手放した場合、シリア機甲化部隊に電撃的に下り降りられる危険性はイスラエルもよく認識しているはずである。ヨルダン川は水源をヘルモン山やゴラン高原に持ち、流れの途中ガリラヤ湖を経て更にヨルダン川は死海へと流れていく。イスラエルは最近ヨルダン川の水を南部乾燥地帯の灌漑に大量に使用するようになり、死海に流れ込む水量が激減している。死海の水位は毎年 60 センチぐらいつ下っており、このまま放置すると 2050 年には完全に水枯れする可能性が大である。

ところで、もう一つの領土問題はトルコのハタイ県である。嘗てのアレキサンドレッタ（現イスケンデルン）やアンテオケ（現アンタクヤ近郊）の町があった地域で、シリアとトルコの領有権を巡る争いが続いていた。トルコは、トルコからの分離を求めるクルド人のクルディスタン労働者党(PKK)をシリアが支持していることに不快の念を表し、特に PKK 指導者のアブドゥッラー・オジャランがシリアに潜伏していた時には緊張関係にあった。しかし両国関係は、前世紀の終わりから回復し始め、特にイスラム主義系と言われる公正発展党(AKP)がトルコで政権を取ってからの回復スピードは注目に値する。エルドアン首相とアサド大統領はしばしば会談を行っているが、トルコには、シリアとアメリカ、或いはシリアとイスラエルの仲介役を果たそうとの意図が垣間見える。2009年には共同軍事演習をも行う関係になり、両国間の領土問題はもうどこかに吹っ飛んでしまった感がある。

いよいよヨルダン入国である。ガイドのミスマール氏が検問所で迎えてくれた。『地球の歩き方』にも紹介されている有名人だ。荷物チェックで、アレppo石鹸の大量購入者数名が引っかかる。固形爆弾とでも見えたのであろうか。通関後、ヨルダン最初の目的地ジェラシュに向かう。昔はゲラサと呼ばれ、「マルコによる福音書」5章によると、イエス一行はガリラヤ湖の向こう岸ゲラサ人の地に着いたとき、汚れた霊につかれた人物(demoniac)に迎えられる。イエスは汚れた霊を豚に乗り移らせると、2000匹ほどの豚の群れががけを駆け下り湖へなだれ落ちてしまった話である。一般に The Gerasene demoniacs として知られている話であるが、イエス

はこの人物が自分につき従うことを許さず、自分に起こったことをデカポリスの地方で言い広めるように命じる。この頃ゲラサは、ダマスカスやフィラデルフィア（現アンマン）を含むデカポリスの中でも主要な町であり、この福音書の話は、デカポリス地区が異邦人の居住する地域であったことを示している。ジェラシュ遺跡の大きさもかなりのものであるが、今の遺跡は昔の町の西半分だけであって、現在のジェラシュの町の下には更に遺跡の半分が埋もれている。町の外に一部残る城壁によって囲まれる部分をすべて入れると、2年前に人文研で訪れたトルコのヒエラポリスの遺跡を大きさにおいて上回るとは、ガイドのミスマル氏の説明である。ボスラと比べるとジェラシュは、遺跡観光地としてはかなり洗練されている。施設も綺麗だし整備が行き届いている。地元民が遺跡内に居住していることもない。1970年代に出版された新約聖書概説書にあるジェラシュ遺跡の写真を幾つか見てみたが、この当時は草も生え整備も十分でない素朴なローマ遺跡との印象であったが、今は逆に観光化が進みすぎた印象は拭えない。

遺跡の南端のハドリアヌスの門と称される凱旋門をくぐり、ヒポドゥロームと呼ばれる競技場に入る。この種のものとしてはローマ遺跡の中では最小の部類に属するとの説明だが、決してそのようには見えない。観光客用にベンハーならぬ騎馬戦車が砂地の競技場を駆け巡っていた。フォルムから800メートルにも及ぶと言われる列柱通りを望み、今度は後を向くとゼウス神殿と南劇場がそびえたつ。劇場に入ると、少々やつれた軍楽隊員らしきおじさんのバグパイプ演奏で迎えられた。ミスマル氏の話では、このおじさん昔は警察官であったそうだ。そう言えばミスマル氏も元警察官。日本語があまりに流暢で冗談もうまくどこまで信じてよいか



写真4 ジェラシュ遺跡、フォルムと列柱通りの向こうに新市街の一部が見える。

判断に苦しむが、ヨルダン治安が良いため警察の最も重要な仕事は交通警察での取り締まりだそう。所謂ネズミ捕りであり、ご本人はそれが嫌になってやめたとの話であった。この遺跡で一番印象に残ったのはアルテミス神殿であった。パウロの第3回伝道旅行の話（「使徒の働き」19章）に出てくるエペソのアルテミス神殿程の荘厳さはない。（もっとも2年前の人文研旅行で訪れたエペソのアルテミス神殿跡も、フィロンが挙げる世界の7不思議の1つに数えられているだけあってその神殿跡の壮大さに感嘆したが、現在残っているものとしてはポツンと円柱1本であった。）しかしジェラシュ遺跡ではこの豊穡の女神の神殿がかなりよく保存されており、数多く残る円柱の下に立つとその重量に押しつぶされそうである。神殿を支えていた円柱はいくつかの円筒を積み上げて作ったように見え、その一番下の礎石もしっかりとは固定されていなくて不安定な印象は免れない。しかし、この柱の設計に見られる余裕こそが耐震構造（正確には免震構造）であるとのミラマール氏の説明であった。彼自身日本在住経験があり日本のことを良く知り、しかも日本人相手の話となれば耐震の「科学的」根拠が求められるが、妙に納得させられる説明であった。

## 6. ヨルダン縦断

ジェラシュからアンマンに到着し、その夜はアンマンに泊まる。ホテルはル・メリディアン。一応高級ホテルだが、2005年11月にこの町のグランド・ハイアットやラディソン・サス等のホテルが、自爆テロで一部破壊され多数の死傷者を出した事件を思い出す。この事件のことを思い出しアンマンでは中級ホテルにしようかと迷ったが、快適さを優先させた。高級とは言っても、欧米や日本的高级ホテルとは施設、サービスで劣ることは後に判明する。ホテル入り口では、空港のセキュリティを想起させる荷物検査がある。そして翌28日、ペトラに向かう。途中マダバを見学する。キングズ・ハイウェイを南に30キロ程下ったところにある町だ。ここから少し行ったところにモーセ終焉の地ネボ山があるのだが、先ずはマダバの町の一番の名所、モザイクで6世紀頃のパレスチナの地が床に描かれている聖ジョージ教会を訪れた。この教会はギリシア正教の教会で、会堂正面には派手さはないがイコノスタスもある。床のモザイクは一部はがれているものの保存状態はよい。教会自体は19世紀末の建造だが、モザイクだけは6世紀のものである。聖墳墓教会が描かれているモザイク上のエルサレムは、「アエリア・カピトリナ」と称され、エルサレムの真ん中を南北に列柱がある道（カルド）が走る。バル・コクバの反乱鎮圧後、135年にハドリアヌス皇帝によって再建されたエルサレムは、ユダヤ色をなくしたローマの町に見える。死海には大きな船が浮かび、ヨルダン川には魚が泳ぐ。エリコの町にはナツメヤシが数本見られる。（ところで、マダバのナツメヤシのチョコレートは有名

と聞き、参加者一同教会からバスへの帰路に購入する。お隣のシリアのチョコレートも欧米では人気で、Ghraoui や Art Chocolate は高級コンフェクショナーとして知られる。そう言えば、ベルギーチョコの Godiva も今はトルコの会社ウルクルの傘下にある。) エジプトのアレキサンドリアの位置に若干間違いがある他は、パレスチナ地方のかなり正確なモザイク地図である。

マダバから少し行ったところに、モーセ終焉の地ネボ山がある。山と言ってもマダバ側から入ると下から見上げる山ではなく、少し盛り上がったほどのマウンドである。ヨハネ・パウロ 2 世訪問の記念碑を見てフランチェスコ修道会の教会に入る。期待していたモザイクの床は修復中とのことで見るができなかったが、その先に展望台から見るヨルダン川流域の渓谷や死海は、渓谷には霧がかかりエリコの方まで見渡せなかったが絶景である。ネボ山自体は 800 メートル程の山であるが、死海の高さがおよそマイナス 400 メートルであるから死海の湖畔とはかなりの高低差である。ヨルダン渓谷から死海にかけて霧がかかっているため底の見えない深みを感じる。この渓谷にイエスの洗礼の場が、ヨルダン川のヨルダン側に確認されたとのことである。ワディ・ハラールと呼ばれる地で、観光客の訪問が絶えないとのことである。イスラエル側にもそれらしきものが存在するが、それはイスラエルが勝手に主張しているものであるとはミスマル氏のコメントである。しかし、イスラエル側にあると言っても、6 日間戦争以前はヨルダン川西岸もヨルダン領であったことを考えると、真贋闘争を展開することでもないようだ。展望台からは、モーセが見たようにナツメヤシの町エリコの方向を確認しバスに戻った。主はモーセに西の海（地中海）まで見せられたとあるが、我々にはそこまでは到底見ることができない。

ネボ山から死海にバスで下りる道は、勾配をかなり急激に下りるためか耳が痛い。途中ベドウィンのキャンプ地がある。彼らのテントは、色やデザインが色々あるが、黒や茶色のものが目立ち稀に白色のものがある。飼っている家畜の色によるらしい。ベドウィンは夏の間は山に暮らし、冬は暖かい死海の周りに降りてくる。遊休地等にテントを張って暮らす。今では車を所有するものもいる。ノーマドである彼らを、土地の所有者が追い出すということはないと聞く。ベドウィンはれっきとしたヨルダン国民であり、無国籍のジプシーとは全く違った存在である。ベドウィンは着ている衣服の色も地味で、ぼろとは言え明るい色を好むジプシーとは区別しやすい。ベドウィンの男性が頭に被るスカーフはカフィーヤと呼ばれるが、パレスチナでは黒白のチェック模様に対してベドウィンは赤と白で見栄えがする。このようにカフィーヤは大きく分けると 2 つに大別できるが、実は色々な模様があるらしい。冬は風よけで暖かく、夏は日よけによさそうだ。ネボ山からの下山途中に、警備のチェックポイントがあった。カメラを向けないようにとの指示はあったが、無事通過。平和な地域なのか、警備のヨルダン人はいたって明るく愛想が良い。シリアでは、空港等警備の兵がいる施設では決して写真撮影をし

ないように徹底していたが、より近代化の進んだヨルダンでも状況は同じである。警備といえば、ヨルダンではバスに必ず交通警察の警官が1人同乗する。我々のバスにも若いお兄さんが乗り込んできたが、緊張感は全くなくテロがあった時に我々乗客の盾になって戦ってくれるのだろうかやや不安に思う。どうやら1997年にエジプトのルクソールであった、外国人観光客襲撃事件以後の措置であるようだ。ルクソールでは日本人観光客も犠牲になっているから他人事ではない。

死海に着くと数名が「高塩分水の比重調査」と称して浮遊体験をする。死海の水にはカドミウムが含まれるから、目や口に水を含んで塩分チェックもできず「化学的分析」はできなかったが、ラッコ型よりシンクロならぬ立ち泳ぎが首に負担がかからず一番楽な姿勢であるとの発見にいたる。イスラエルによる途中取水によって年々水位の低下に悩む死海とヨルダン川であるが、川の流域がヨルダンにとって重要な農業地帯であることに変わりはない。同一作物を年3回収穫可能と聞く。トマトを中心に農産物を満載したトラックが行き来していた。ヨルダン川流域から首都アンマンまでは立派な道が整備されており、途中海拔0メートル地点を通過して、ネボ山の山系を迂回するかたちで一端アンマン南部まで戻る。そして、マダバの東を通るデザート・ハイウェイを南下してペトラを目指す。サロメがバプテスマのヨハネの首を所望したとされる城塞ムカーウィルは当初の旅程に入れていたが、結局時間の関係で立ち寄ることができなかった。

旧約聖書の創世記36章によると、ヤコブの兄エサウの子孫とされるエドム人は死海の南の山岳地帯に居住し、イスラエル王国が建国される前からこの地は王達によって治められていた。モーセに率いられたイスラエルの民がエドムの地を通過しようとした時に、エドムはその通過を阻止しようとしている。またモーセの兄アロンが死んだのも、このペトラの地にあるハル山であると「民数記」に記載がある。時代は下ってイスラエル王サウルはモアブやエドムと戦ったが、実際にエドムの地を制圧したのはダビデであった。その後バビロン捕囚により力の空白地帯となったユダヤの放牧地にエドム人が移る紀元前6世紀頃に、南からナバタイ人がやってきてナバタイ語の碑文を残しているとの説もあるが、ナバタイ人がペトラ地域に定住しこの磨崖建築都市を建築したのは紀元前2世紀頃からである。彼らは、王の道を通る隊商の安全を守る仕事で資金を蓄える。隊商の道であった王の道はペトラ遺跡の近くを通るが、このナバタイ人の子孫が今もラクダ牽きや土産物店等遺跡での独占的商取引の権限を得ているとのミスマー氏の説明である。このナバタイ王国もローマ皇帝トラヤヌス帝の頃には征服され、ローマに吸収合併される。

翌29日朝、宿舎となったワディ・ムーサの町を出発する。この町にはモーセが岩を杖で叩くと水が湧き出たというモーセの泉(Ayn Musa)がある。モーセの泉については、出エジプト記



15章の舞台であると言われるシナイ半島のマラ等、この辺りには幾つかモーセの泉とされている伝説の場所がある。まずバスでビジターセンターに行き、そこから砂利道を歩くと、左にオベリスクの墓が見える。何をしているのかチャードルのような黒っぽい衣装に身をまとったベドウィンらしき老女が、墓の洞窟の前に座っている。しばらく歩いてシーク(Siq)と称される狭い岩の裂け目の道に入る。道の両側に水路跡が残りナバタイ人の技術の確かさを証明している。映画『インディ・ジョーンズ 最後の聖戦』の中の博士のようにシークを疾走とはいかないが、ゆっくりと第一の目的地エル・ハズネ（宝物殿）に向かう。オベリスクの墓の近くのジン・ブロックス(Djinn Blocks)でも見たナバタイ人の神ドゥシャラ神の祠が、シークでは道の真ん中に鎮座していた。エル・ハズネは、1839年にデヴィッド・ロバーツが残した描写と比べると前の広場が幾分片付けられているが、宝物殿そのものは噂どおりの壮麗なバラ色の建造物である。エル・ハズネから更に道を先に進んで、犠牲祭壇やローマ円形劇場を見る。そして、王家の墓を遠くから見上げた後に列廊通りに入る。大体ジェラシュの列廊通りと同じ2世紀初め頃に作られた、言わばペトラの中心部分である。ジェラシュ同様に半神半人の妖精ニンフに捧げられた建造物ニンファエルム跡があり、そこからこの列廊通りが始まる。列廊通りにはほぼ並行して丘の上を一本の道が通り、そこを黒塗りのRV車が4～5台土煙をあげてゆっくりと走行している。小泉純一郎首相来訪時はヘリコプターでここに到着したという話であるが、RV車も元首とまではいかなくてもVIPの送迎用らしい。凱旋門の先まで行き、昼食を終えてから来た道を通って帰路についた。残念ながら時間の関係で、エド・ディルやアロンの墓があるジャバル・ハルーンへは行くことができなかったが、ホテルへの帰りのバスを止めたワディ・ムーザの町のはずれから、ペトラの山並みを見る中にジャバル・ハルーンの方角をミスマール氏が指してくれた。昼食後デザート・ハイウェイを通ってアンマンへの帰途に着く。途中昔のエドムとモアブの「国境」の町にある土産物屋兼ドライブインで休憩をとる。「国境」には小さな乾ききった涸れ川ワディがあった。

## 7. アンマンと死海写本

翌30日はアンマン市内調査の一日である。嘗て旧約聖書ではラバとかラバトと呼ばれ、ギリシア語ではフィラデルフィアと記された近代都市アンマンの街は、年の瀬も押し詰まってごった返していた。アラブ色を残しながらも、西欧の下町的雰囲気は気持ちを楽しませる。昔と今が雑踏の中でうまく折り合った町である。アンマン城（シタデル）にバスで登り、まずウマイヤ朝時代の宮廷跡を見て回る。途中展望台からは遠くに重そうにはためく巨大シリア国旗を目撃。縦30m横60mと言うことであるが、絹で織られしばしば作りかえられるらしく、ミ

スマール氏もその無駄を嘆いている。アンマン滞在中彼が口にした母国に対する数少ない不満の一つであった。この後、アンマン城内にあるヨルダン考古学博物館に立ち寄る。入ると正面奥に印象的なシリアの女神アタルガティス像が鎮座する。ナバタエ人の神殿から運ばれてきた像であるが、豊穡の神らしく像の周りは植物の彫り物で飾られる。ドゥラ・エウロポスの町の中心近くにも、バアル神殿と同じようにアタルガティスの神殿があったと言われるから、大シリアのかなり広い地域でこの女神は崇められていたと考えられる。そしてヨルダン考古学博物館で最も注目される展示物の一つは、死海西岸のクムランから出土した死海写本の断片であろう。

死海写本についてミスマール氏は、「写本の内容がすべて公開されると、キリスト教徒にとってはキリスト教の信頼性を損なうまづい情報があるので写本の公開が遅れている。」と説明する。彼はガイドとしての案内内容については正確を期するガイドであるが、ユダヤ教（イスラエル）やキリスト教については、冗談も含めたりしているので辛辣さはないが常々厳しい評価を下す。1947年（46年末との説もある）に死海北西岸のヒルベト・クムラン遺跡近くの洞窟でベドウィンによって発見されて以来、専門家による死海写本公開に向けての作業は遅々として進まなかった。そこから様々な憶測が生まれたのである。写本やその断片の購入を巡る個人、研究所、博物館、国家間の思惑や、中東戦争の影響も死海写本の所在に大きく影響を及ぼし、学問的公開を遅らせる原因になったと言えよう。元々死海写本の発見と公開には、当初から金銭欲やエゴが大きく絡まっていた。しかし、ミスマール氏のような「誤解」が広まるのに最も責任ある学者は、最初にドゥ・ヴォーの下に結成された写本公開に向けた編纂チームのメンバーの1人となったイギリス人ジョン・アレグロであったかも知れない。これまでクムランにおいては11の洞窟からの発掘がなされてきたが、アレグロは1966年に、第4洞窟を担当したチームがキリスト教に都合の悪い内容を含む恐れのある重要テキストの公開を抑えていると非難したのである。（第1洞窟出土の写本については、1955年にそのすべてが公刊されている。）アレグロは、クムラン宗団を形成していたと思われるエッセネ派とキリスト教の密接な関係を主張し、死海写本と新約聖書の間類似性を指摘する。これはイエスの到来が神により主導された歴史的出来事であるとする、その他の編纂チームメンバーと相容れない考え方であり、純粋に学問的見地から発言しないアレグロを彼らは批判した。

ドゥ・ヴォーをはじめとして編纂チームの多くがカトリック教徒であり、彼らが写本を囲い込んで公開を遅らせているとの不満は、アレグロだけでなくその他の学者にもあった。しかし、公刊が遅れた最大の理由は、編纂チームのメンバーが写本以外の仕事も含め多忙を極めていたからであろう。ばらばらな写本の断片を一つ一つ組み合わせていく彼らの労力は、もう少し評価されても良さそうである。死海写本に関する参考文献として下に挙げた邦訳2書のうち、クックの書は編纂チームに好意的で彼らの労苦を評価しようとの立場である。他方ジャンクスは、

聖地関連に興味を持つ読者が多い *Biblical Archaeology Review* の出版者で、編纂チームのドゥ・ヴォーやミリック等のカトリック神父、或いは反ユダヤ的なストゥラグネル教授に対して批判的である。シャンクス『死海文書の研究』の巻末には、「死海文書にまつわる沈黙と反セム主義」や「ヴァチカンが死海文書研究を抑圧しているか」といった刺激的章が並ぶ。

クムラン宗団がエッセネ派と断定できるかどうかについても、議論が長らく続くことになる。クムラン宗団は紀元前2世紀初期頃に誕生し、紀元後66年から70年の第1次ユダヤ戦争で終焉を迎えたと言われている。この頃ユダヤには、エッセネ派やイエスと対立したパリサイ派の他に、サドカイ派やローマに反旗を翻す熱心党の4つのセクトが存在した。そのうちエッセネ派については、有名なユダヤ人歴史家ヨセフスが『ユダヤ戦記』や『ユダヤ古代誌』の中でセクトの特徴を報告している。彼やアレキサンドリアのフィロンのエッセネ派に関する記述を総合すると、このセクトの特色としては富の軽蔑、共有財産制、商業に従事しないこと、奴隷を所有しないこと等が挙げられており、その多くが下に記した死海写本中の「宗団文書」(sectarian manuscripts)の内容と一致する。もちろん支持する学者の数は少ないが、サドカイ派説、パリサイ派説、熱心党説も存在する。エッセネ派説が有力な中で、サドカイ派説も支持を伸ばしていると言われている。エルサレムの祭司階層であるサドカイ派が、どのようにクムラン宗団と関わりがあるのかについてこの説の提唱者たちは、サドカイ派体制派から分離した所謂「落ちこぼれ」のサドカイ派が荒野でこの宗団を形成したと考える。イエスとの論争で有名なパリサイ派も、クムラン宗団の戒律の一部に共通する部分を持つが、今日パリサイ派仮説に立つ学者は殆どいない。パリサイ派よりは熱心党の考えの方が、宗団の状況に近いかもしれない。熱心党はローマのユダヤ支配を拒絶する自由戦士の集団であり、ローマに協力的な人物を殺害したりして異邦人との接触を極端に忌み嫌った。メンバーの中には異邦人のけがれを避けてユダヤの荒野に赴くものや洞窟に住むものも存在したと言われる。このように、クムラン宗団を形成するグループについてはエッセネ説が有力ではあるが、今日に至るも結論は出ていない。

ところで、死海写本に対する評価は様々であるが、旧約聖書や外典(apocrypha)の写本としては現存するものとしては最も古い。発掘されたものの中では、ヘブル語聖書写本関連が4割程を占めるが、その他に外典や偽典(pseudepigrapha)、ユダヤ教セクトの信仰や規則について触れた宗団文書と呼ばれる「戦いの巻物」「共同体規則」「ハバクク書註解」「ダマスコ文書」等がある。外典や偽典は死海写本発見以前から知られていたが、宗団文書は以前には全く知られておらず、これら文書の発見はユダヤ教やキリスト教の歴史やその解釈に大きな影響を与えることとなった。一つ言えることは、死海写本の発見とその後の旧約学者等による調査によって、これまでの旧約聖書訳とは一部を除き殆ど内容に相違がないことが判明したことである。その

意味で死海写本は、旧約聖書の伝承過程の正確性を証明したことになる。筆者は写本断片の一部が保管されているシカゴ大学オリент研究所を以前訪れたことがあるが、オリент研究所や今回訪れたヨルダン考古学博物館が保管する写本断片は全体の一部である。第3次中東戦争で東エルサレムがイスラエルの手に落ちる前に、有名な「銅の巻物」や第1洞窟出土のいくつかの断片はアンマンに移送されていた。しかし、第4洞窟と第11洞窟の巻物等多くの写本が、イスラエルの死海写本博物館である写本館(Shrine of the Book)に置かれている。イスラエルはこの6日間戦争で、東エルサレムやヨルダン川西岸だけでなく、これまでヨルダンが管理していたパレスチナ考古学博物館も手に入れたが、このことは考古学的観点からは最大の戦利品を獲得したことになる。

アンマン城から下りてローマ劇場に向かう。ローマ劇場には伝統文化博物館と民俗博物館が併設されているが、この後訪れるサルトの女性の民族衣装が印象に残る。ローマ劇場の入り口近くからアンマン城を見上げると、ミスマール氏は透かさず「この崖がヘテ人ウリヤの戦死したところです。」と説明し、不義の子ソロモンによって導かれたイスラエルのその後の悪政に言及した。旧約聖書の英雄ダビデやソロモンに対して、ミスマール氏の評価はかなり手厳しい。旧約聖書「サムエル記 第2」の第11章に出てくる有名なダビデとバト・シェバの話である。ダビデは水浴中のバト・シェバに見とれ関係を持つが、バト・シェバは身ごもってしまう。ちょうどその頃イスラエルの軍は、司令官ヨアブの指揮の下アンモン人と戦いラバ(ラバト・アンモンとも呼ばれ、現在のアンマン)を包囲中であつた。バト・シェバの夫はヨアブの下でアンモン人と戦っている軍人ウリヤであつたが、ダビデはヨアブに命じて、ウリヤをラバ包囲戦で真正面の最も激戦の地に置き去りにして戦死させる。ウリヤ戦死後にダビデとバト・シェバの間に生まれたのが第2子であるソロモンである。ソロモンは第1神殿を建て知恵者との噂であつたが、彼の死後国は分裂する。一般にソロモン評価は分かれるが、やはり反イスラエル思考は、普段は非常に冷静なミスマール氏にも染み付いているらしい。ローマ劇場から崖を見上げると、ヨアブもこの城を攻めあぐねたであろうと容易に想像がつく。「サムエル記」によれば、ウリヤが対峙したのはラバの精鋭軍であつた。ローマ劇場に別れを告げアンマン城を見上げながら、今度はアンマンを代表するモスクであるキング・アブドゥッラー・モスクへ向かう。ブルー・モスクとも称され、3000人収容可能と言われるだだっ広い礼拝堂を見る。ヨーロッパのカテドラルを見慣れていると、祭壇のない礼拝堂はどれも落ち着かない。

昼食を市の中心部の庶民派レストランでとる。ヨルダン名物のマンサフ等を注文する。派手ではないが料理の味は確かである。それを知ってか、丁度午前の仕事を終えた近くの会社員や地元住民で店はすぐに一杯になった。多くのヨルダン人は17時になると仕事は途中でもその場でやめてさっさと帰宅すると聞くが、それにしては昼食もゆっくりしたペースである。昼は

蕎麦を駆け込み、夕方からは残業が当たり前で隣の国から来ると羨ましさを乗り越えて光景が奇異に映る。昼食後アンマンの北西 30 キロにあるサルトの町を訪れた。ミスマル氏の出身地でもあるこの町は、オスマン時代にこの地域の行政の中心として、また交易ネットワークのハブとして栄えた。オスマン政府は、現在イスラエルの地にあるナブルス(Nablus)から商人層を多くこの地に移住させたが、その状況は下記の歴史博物館でも確認することができる。ヒジャーズ鉄道に近いとの理由でトランス・ヨルダン王国の時代に首都がアンマンに移され、サルトは衰退の道をたどる。イスラエルの建国でハイファ港との繋がりが切れ、更に第3次中東戦争でナブルスがイスラエルに占領されると、サルトは最近まで3つの丘に囲まれた陸の孤島と化した感があった。それにしてもサルトは、山吹色をした建物が並びなんとも明るい雰囲気のある町である。古い建物の保存を通じた観光開発のために日本政府の円借款事業としての援助がなされているが、今回の訪問の目的も、JICA のプロジェクトでサルトに滞在中の大山晃司先生から、建物の修復作業や博物館建築活動を通じた観光振興の現状等を伺うためであった。大山氏はヨルダン政府の観光遺跡省との繋がりが深い。まだ観光客が押し寄せることもないアンマン近郊の穴場の町であるが、最初に訪問したツーリスト・センターの出来栄えといい、この町の観光にかける意気込みを感じた。JICA の支援内容は本号に掲載される大山氏の紹介記事に譲るが、現在日本の援助で歴史博物館（というより民俗博物館の様相である）として公開されるアブ・ジャーベルの家を、まだ準備中であるにもかかわらず開けていただいてお話を聞くことができた。中国のような派手な箱物の援助ではないが、日本らしい実質的援助で着実に成果を挙げているように見えた。昨今の民主党の仕分け作業で批判の矢面に立たされた JICA であったが、サルトではよく考えられたプロジェクトが機能していた。

大シリアを巡る旅も終わり、大晦日の早朝アンマンを発ち、乗り継ぎのためにトルコ航空便でイスタンブルに向かった。しばらく飛ぶと左に北キプロスのカルパス半島が見える。1964年のキプロス紛争時のメディア報道の影響で、世界の多くの人々はトルコがこの紛争では侵略者であるとの印象を抱いてきたが、2年前のトルコ旅行で我々のトルコに対する印象は完全に変化している。複雑な政治、宗教情勢にもかかわらず、我々旅行参加者達のトルコ評は極めて高い。トルコ上空に入ると眼下にベイシェヒル湖とエイルディル湖が見える。丁度2年前の人文研トルコ旅行で、霧のコンヤからパムッカレに向かう途中、霧が晴れた辺りがベイシェヒル湖の湖畔辺りであった。そこからエイルディル湖の北を回ってパムッカレにバスを進めている。イスタンブル空港に着くと、2年前もガイドを務めてくれたフズーリ氏が迎えてくれた。夕方からの帰国便に乗るまでのイスタンブル再訪である。世俗主義の国是の守護者を自認する軍の高官が、クーデターの嫌疑をかけられて公正発展党政権によって拘束され、政権と軍及び司法当局との緊張が高まる2ヶ月程前であったが、大晦日のイスタンブルは買い物客でごった返してい

た。2年前マルマラ大学のキャンパスでお話を伺ったオスマン史のミュジュテバ・イルギュレル先生は、スカーフ問題に関してキャンパス内での世俗主義の維持を熱っぽく語っておられた。しかし、今年に入ってマルマラ大学学長は、キャンパス内でのスカーフ着用について寛容な態度を示していた。建国以来の伝統である世俗主義にも、若干の変化の兆しが見られるのであろうか。

## 参考文献

- エドワード・M・クック『死海写本の謎を解く』土岐健治監訳、教文館
- ピーター・クレイギー『ウガリトと旧約聖書』津村俊夫監訳、教文館
- ハーシェル・シャンクス『死海文書の研究』池田裕監訳、ミルトス
- J. グレシャム・メイチェン『パウロ宗教の起源』聖書図書刊行会
- 黒木英充「オスマン期アレppoにおけるヨーロッパ諸国領事通訳」『一橋論叢』第110巻第4号（1993年10月）
- 黒木英充「ギリシア正教＝カトリック衝突事件 ―アレppo、1818年―」『アジア・アフリカ言語文化研究』Nos. 48-49（1995年）
- 黒木英充「ナポレオンのエジプト遠征期のアレppo」『アジア・アフリカ言語文化研究』No. 58（1999年）
- 黒田美代子『商人たちの共和国―世界最古のスーク、アレppo―』
- 末近浩太「シリア・イスラーム革命宣言および綱領」『イスラーム世界研究』第2巻1号（2008）257-270頁
- 田中奈美他「途上国における観光開発インパクトと持続性に関する研究 ―ヨルダン国の事例調査―」神戸芸術工科大学紀要、芸術工学2006
- 谷口淳一「アレppoの宗教施設：12～15世紀のジャーミィとマドラサを中心に」『史学雑誌』109（12）
- 土井正興「スパルタクスとイエスの間」『福音と世界』1973年12月号、新教出版社
- 堀江洋文「レヴァント・カンパニーとトルコ」『専修大学人文科学研究年報』第235号
- 山本達也「開発途上国における情報化の進展とICT支援政策―中東アラブ諸国の事例を中心に―」国際協力機構JICA研究所、準客員研究員報告書、2004年6月
- 中東調査会『かわら版―東地中海地域ニュース』2009年5月1日
- 歴史学研究会編『世界史史料8 帝国主義と各地の抵抗I 南アジア・中東・アフリカ』岩波書店
- ニューズウィーク日本版、2010年1月20日号

- Richard T. Antoun & Donald Quataert, eds., *Syria: Society, Culture, and Polity* (Albany NY, 1991)
- Alfred B. Brados, 'Syria: U.S. Relations and Bilateral Issues', *CRS Report for Congress*, June 22, 2006
- F.F. Bruce, 'The Bible and the Environment', *Living and Active Word of God. Essays in honor of Samuel J. Schultz* (Winona Lake, 1983), eds., Morris Inch & Ronald Youngblood.
- E. von Dobschütz, 'Die Berichte über d. Bekehrung d. Paulus', *Zeitschrift für die neutestamentliche Wissenschaft*, 29 (1930), 144-7
- Fred H. Lawson, 'Syria's Intervention in the Lebanese Civil War, 1976: A Domestic Conflict Explanation', *International Organization*, vol. 38, no. 3, 451-80
- Robert H. Gundry, *A Survey of the New Testament* (Grand Rapids, 1970)
- Ernst Haenchen, *The Acts of the Apostles: A Commentary* (Philadelphia, 1971)
- Douglas Harink, *Paul among the Postliberals: Pauline Theology beyond Christendom and Modernity* (Grand Rapids, 2003)
- Albert Hourani, *A History of the Arab Peoples* (Cambridge Mass., 1991)
- The Works of Josephus* (Lynn, Mass, 1980), translated by William Whiston
- Gerhard Kittel, ed., *Theological Dictionary of the New Testament* (Grand Rapids, 1964), translated by Geoffrey W. Bromiley, vol. II.
- Werner Georg Kümmel, *Introduction to the New Testament* (Nashville, 1975)
- Richard N. Longenecker, *The Road from Damascus: The Impact of Paul's Conversion on His Life, Thought, and Ministry* (Grand Rapids & Cambridge, 1997)
- Martin Luther, 'Predigt von der Bekehrung S. Pauli', *Luthers Werke* (Weimar, 1914), Bd. 51.
- Jaroslav Pelikan, *The Emergence of the Catholic Tradition (100-600)* (Chicago & London, 1971)
- Barry Rubin, *The Truth about Syria* (New York, 2008 paperback)
- E.P. Sanders, *Paul and Palestinian Judaism* (London & Philadelphia, 1977)
- Samuel J. Schultz, *The Old Testament Speaks* (New York, 1970)
- William I. Shorrock, *French Imperialism in the Middle East: The Failure of Policy in Syria and Lebanon 1900-1914* (Madison, 1976)
- Krister Stendahl, *Paul among Jews and Gentiles* (Minneapolis, 1976)

Emanuel Tov, *Hebrew Bible, Greek Bible, and Qumran* (Tübingen, 2008)

'Syria, Papers relating to the disturbances in Syria: June 1860', *House of Commons Parliamentary Papers, Command Papers; Accounts and Papers, no. 2715.*

〔追記〕

われわれはアレppoに着いた翌日の夕方、アレppo大学学術交流日本センター（通称「日本センター」）を訪問した。同研究所は慶應義塾大学（湘南藤沢キャンパス）と提携している。日本でそのことを聞いたとき、アラブ圏に慶應義塾大学と提携する機関があるとすれば、おそらく『コーラン』の邦訳で知られる井筒俊彦氏や『アラビアン・ナイト』の訳者でもある前嶋信次氏といった慶應義塾大学を拠点に活躍した日本を代表するイスラーム文化の碩学たちと関係があるのかと思われたが、その推測は当たらなかった。以下は、慶應義塾大学教授で現在日本センターの副センター長を務める奥田敦氏に伺った同センター設立のいきさつである。

1994年に国際大学の黒田壽郎教授と当時のアレppo大学学長ムハンマド・アリー・フーリー工学博士との間で、日本との交流センター設置についての合意が成立したのが出発点であった。同年、シリアの高等教育省によりセンター設置の申請が認定され、センターは翌年から本格的な活動を開始した。センター長はアレppo大学学長、副センター長はアラブ伝統科学研究所長と黒田氏が当たり、奥田氏も主幹として最初からこれに関わった。主な活動としては、月例講演会、日本大使館との共催による日本文化紹介事業、ジャイカ（独立行政法人国際協力機構）との協力による日本語教室の設置などが実施された。2002年には、日本留学で工学の博士号を得て帰国したアフマド・アルマンズール氏がアレppo大学側の責任者となり、副センター長（センター長は現在もアレppo大学学長）として現在もセンター運営を指揮している。われわれの訪問の数ヶ月前に、センター主催、日本大使館と慶應義塾大学の共催になる「日本フェア」が開催され、多くの市民が参加したという。われわれがセンターを訪問した折にアルマンズール氏は、おそらくその時にシリアの人々が折ったと思われる沢山の折り紙に囲まれた部屋で、懇切にセンターの活動や日本との関係について語り、翌日には市内見学のガイドまでつとめられた。

なおこれも帰国後に奥田氏からいただいたメールによると、センターの設立を主導した黒田氏は、井筒俊彦氏の書生までつとめたいわば直弟子としてイスラーム学を学んだという。その意味では、井筒氏が築いた日本におけるイスラーム学の伝統がアレppoの日本センターの設立と深くつながっていると言えるかも知れない。ところで帰国後人文研では、所員に呼びかけて日本関係の書籍を寄贈していただき、それらを日本センターの方にお送りした。

（内藤 雅雄）